帝國讀本

新制第一版

卷二

375.9
Ha7
資料室

41571

教科書文庫

4
810
41-1931
2000301558

資料室

375.9
Ha7

文部省檢定濟
昭和六年十二月二十三日　中學校國語漢文科

文學博士　芳賀矢一　編
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補

帝國讀本

新制第一版

東京　合資會社　冨山房發兌

良寛と子供等

河内舟人館

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
30751
書

帝國讀本　卷二

目次

一　月雪花……一
二　小野篁と源經信……八
　一　小野篁……八
　二　源經信……一一
三　歩いた途（詩）……河井醉茗……一四
四　童心……北原白秋……一六
　空中習字（自修文）……相馬御風……二三
五　平泉より……吉田絃二郎……二七
六　幼帝の御仁慈……三〇

七 訓言五則……三七
一 人を責むること勿れ……三七
二 人の行に長短あり……三八
三 得たる所得ざる所……三九
四 人の長短……三九
五 長を取り短を捨つ……四〇
八 天龍川下り……和辻哲郎……四二
九 冬の國……吉江喬松……四九
一〇 小さい旅人……薄田泣菫……五六
一一 雁（詩）……千家元麿……六五
一二 ロンドン市民の父……大山廣光……六七
一三 エヂソン（自修文）……中原岩三郎……七四
一三 大石良雄その一……山路愛山……八〇

一四 大石良雄その二……山路愛山……八七
一五 多摩御陵に詣でて……九四
一六 新年……一〇一
一七 たのしみは（短歌）……橘曙覽……一〇五
一八 神と地獄極樂……一〇六
一 神……村井知至……一〇六
二 地獄極樂……塚原澁柿園……一一〇
一九 孝子の至情……一一三
黑田如水（自修文）……八波則吉……一一七
二〇 フレデリック大王と酒井備後守……幣原坦……一二〇
二 歌話……中村秋香……一二五
一 とりゐ坂……一二五
二 あがたの宿……一二六

三　燒野の原……一二七
二二　まことの始……一二八
二三　多年一日の修養……村上專精……一三三
二四　機智縱横……一四〇
一　百人一首の對句……一四〇
二　春水の羽織……一四三
三　奇童……一四四
四　賢い王子……一四七
二五　矛盾……一五〇
名人同志（自修文）……中内蝶二……一五六
二六　春は來ぬ（詩）……島崎藤村……一六三
二七　鉢の雜草……
二八　菅公の詩才……相馬御風……一六六
……一七四

廣島大學圖書之印

帝國讀本　卷二

一　月雪花

春はハナミ、夏はスヾミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。「御月樣いくつ。」の俚歌、「雪よふれ〳〵。」の童謠、月雪花の風流は子供の時から敎へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。

雅興
俚歌

徑庭

詩的教育

塵世

隱遁者

皎々

皚々

利慾に營々たり

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐土人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感ずる所と、我が國民の感ずる所とには、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふ事に關しては、殆ど何の興味をもつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育された。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れる事である。全く塵世を忘れて活動社會を離れる事は隱遁者の所行であるが、少くとも皎たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會

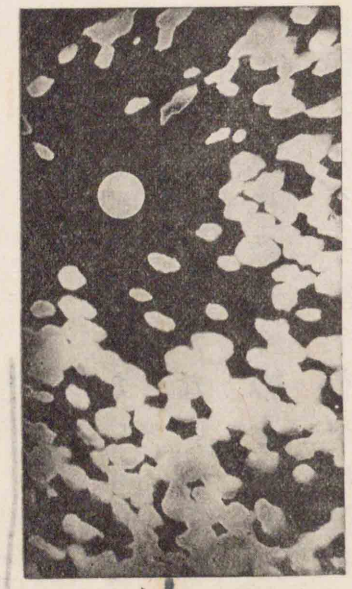
吟詠

譬喩

蹉跌

を忘れるのである。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。「月に叢雲、花に風。」月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひてゐる。



高秋霽月（長野草風筆）

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美德を附加する。

有情化
有德化
光風霽月
君子人
邪佞の徒
なぞらふ
氷潔

無情な物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のない物として、光風霽月などと熟語されて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はその光明を掩ふ物として、小人邪佞の徒になぞらへられる。また雪は氷潔一點の塵のない事から、冷い嚴肅な所を見て、潔白な精神や節操の動かない事を聯想する。花は爛漫たる美しさの忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を擲つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の德を備へてゐる樣に感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を觀賞し得る我等は幸福である。盲人の學者保己

(一)江戸時代の國學者。塙氏。通稱辰之輔。武藏の人。文政四年(一八二四)、年七十六。

逸事

一の逸事として傳はつてゐる話に、或時月に對して、

花ならば探りても見んけふの月

と言つた。また京都に上つた時、御所の南殿の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戲れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも
なか〳〵よしや雪のふじのね

と言つた。

月雪花の眺を恣にする事の出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳說を有しない民族

(一)紫宸殿のこと。

品性
髣髴
心眼

(一)二三六四―二三七〇年。
(二)長野縣更級郡八幡村。月の名所。

もまた人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知る事が出來る。月雪花を通じて、我が國民の歷史は髣髴として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

板鼻檢校

寶永年間、板鼻檢校某貴官に從ひ、信濃の姨捨山を過ぐ。山は月を以て著る。貴官、檢校に問ふ「月色如何。」と。檢校輒ち古歌を誦して曰く、

わが心なぐさめかねつ更科や

(一)漢學者、文學博士。舊鹿兒島の藩士。明治四十二年歿、年八十三。

姨捨山に照る月を見て「で」の字は古歌に清音を用ひたるに、檢校讀むに濁音を以てす。その義一轉して、別に新趣を出しぬ。人その才を稱せり。

重野安繹

寶永年間、板鼻檢校從某貴官、過信濃、姨捨山。山以月著。貴官、問檢校「月色如何。」檢校輒誦古歌曰、

吾心慰免賀爾都更科也

姨捨山爾照留月遠見傳

傳字古歌用清音、檢校讀以濁音。其義一轉、別出新趣。人稱其才。(改修)

―帝國史談―

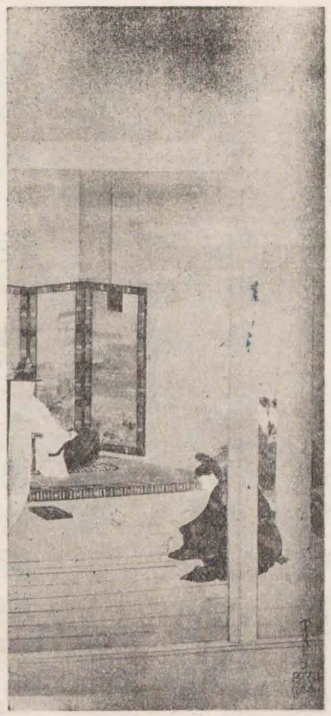
二　小野篁と源經信

一　小野篁

小野篁は參議岑守の嫡子なり。嵯峨天皇の弘仁年間、岑守陸奥守となりてその國に赴きけるに、篁も父に從ひて奥州にありけり。陸奥は牧場の多き所なる故、篁かの國にある間は、常に馬を馳する事を業として、終にその術いたく上達しけり。父岑守、任果て都に歸りても、篁は馬のみ好みて、文學を顧ざりき。帝この由を聞し召して、「篁は岑守が子として弓馬の士となるは惜しき事なり。」と歎かせ給ふ。篁大いに慚悔して、始めて學問に志し、先づ大學寮に入りて、日夜學業を勵みけるに、才智拔群にして、程なく文名高くなりぬ。或時、帝河陽館に幸せられ、詩を賦して宣はく、

「閣を閉ぢて唯聞く朝暮の鼓（閉閣唯聞朝暮鼓）
樓に上つて遙かに望む往來の船（上樓遙望往來船）」

と。これを篁に示し給ひて、所存あらば申せと敕ありけるに、篁、聖作いみじくあそばされ候。但願くは遙望の遙の字をかへて、空望と改めさせ給はば、誠に絶唱と申すべく候はん。」と申しけるに、帝いたく驚かせ給ひ、「汝もとよりこの兩句を知



篁詩を評す（谷口香嶠筆）

(一) 妹子の玄孫。天長七年（一四九〇年）歿、年五十三。
(二) 第五十二代。
(三) 一四七〇―一四八三年。

慚悔

(一) 嵯峨天皇の行宮。淀川の南にあつた。陽宮または河陽離宮とも書ふ。

絶唱

いみじく

れりや。」と仰せられければ、篁謹んで「聖作の一聯、臣いかで豫め存じ候はん。」と答へ奉りき。帝重ねて宣ふは、「この二句は白[一]樂天が句にて、もとは空望とありしを、汝を試みん爲、假に遙望とかへて示せしなり。實に汝は白樂天と詩情相同じき者なり。」とて、大いに賞美し給ひけり。この時白[二]氏文集は僅かに一部渡りて、官庫にあるのみにて、世人未だ見る事を得ざりければ、篁もとより知るべき樣なかりしといふ。篁やがて春宮學士となりしが、事あつて官を剝がれ、[三]隱岐國に流さる。舟に乘りて出立つとて、

[四]わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと
人には告げよあまのつり舟

(一)支那唐代の大詩人。名は居易。會昌六年(西紀八四六年)歿、年七十五。

(二)白樂天の詩文集。七十一卷。古來廣く讀まれて我が國の文學に多大の影響を與へた。

(三)今の島根縣の隱岐島。

(四)古今集卷九、羇旅歌。

と詠みけり。こは百人一首にも選ばれて、人のよく知る所なり。

篁はもとより帝の御寵愛あり、させる大罪にもあらざりし故にや、翌年敕免ありて召還せられ、本の位に復し給ひ、陸奥守となり、更に昇進して參議に任ぜられぬ。[一]文德天皇御卽位の頃、病重くなりて參內を怠りし時には、帝殊に憐み給ひ、度々敕使を遣され、その家にて三位を授け賜はりしとぞ。

二　源經信

[二]源經信は權[三]中納言道方の第六子なり。博學多藝にして詩歌を善くし、また管絃の道にも通じたりき。世に三船の才と言ふ。三船の才とは、王朝の頃、貴族が遊樂を盡したる際、屢、詩

(一)第五十五代。

(二)太宰權帥となつた。承德元年(一七七五年)歿、年八十二。

(三)左大臣重信の子。三船の才

詩歌管絃

歌管絃を三船に浮べ、各その才を選みてこれに乘らしめしが、多能にしてその何れにも乘り得しを言ひしなり。

或時、(一)帝經信を召され、琵琶の名器玄象と牧馬とを取出させ給ひ、先づ牧馬を彈かしめられて、「この二つの琵琶何れか優る。」と仰せけるに、經信「昔、(二)一條院の御時、(三)源信明、(四)信義兄弟を召して、この二つの琵琶を彈き試みさせ給ひしに、信明玄象を彈じ、弟の信義牧馬を彈じけり。然るに牧馬優りて聞えければ、再び兩人をして二つの琵琶をとりかへて彈かしめ給ひしに、この度は玄象優りて聞えけり。されば器物に優劣あるには非ず、彈く人の巧拙による事なり。」と奏しければ、帝げにもと思し召され、また玄象をも彈かしめられしに、果して

(一)第七十二代白河天皇。
(二)第六十六代一條天皇。
(三)三位博雅の第二子。
(四)同じく第三子。

その詞の如く、何れ優劣なかりければ、御感なみ〳〵ならざりしといふ。

經信嘗て八條わたりに住みける頃、九月ばかりの月の美しき夜、空を眺め居けるが、きぬたの音ほのかに聞えければ、

(一)からころもうつ聲きけば月きよみ
まだ寢ぬ人を空にしるかな

といふ歌を吟ぜられしに、前栽のかたに、

(二)「北斗星前旅雁横たふ(北斗星前横タフ旅雁)
南樓月下寒衣を擣つ(南樓月下擣ツ寒衣タツ)」

といふ(三)劉元叔が詩を、誠に面白き聲して高らかに吟ずる者ありぃいかなる人ありて、かくはめでたき聲して吟ずると、驚

(砧)
(一)和漢朗詠集及び新勅撰集、紀貫之の作。
前栽
(二)和漢朗詠集。
(三)傳不詳。

きて見やりたるに、そのたけ一丈餘りもあらんと覺ゆる、髪のさかさまに生ひたる怪しの物にてありければ、「こはいかに。八幡大菩薩助け給へ。」と祈られたるに、この化物、何とてたたりをなすべきとて、かき消す如く見えずなりぬ。さだかにいかなる物の姿とは見覺えざりしと、經信卿の語られしが、朱雀門の鬼などのしわざならんと言はれけり。かの鬼は好者にて、斯樣の事もをり〳〵ありしとか。

（崇）

好者

（一）詩人。名は又平。明治七年堺市に生れた。塔影、霧、醉茗詩集等の著がある。

三　歩いた途

河井醉茗（一）

私の歩いたあとには
花が咲いた。
私の歩いたあとには
泉が湧いた。

私の歩いた時には
荊棘（いばら）の途であつたが。
私の歩いた時には
石くれの途であつたが。

そんな美しい花が
咲かうとは思はなかつた。
そんな清らかな泉が
湧かうとは思はなかつた。

たゞ一歩一歩顧て

靜かに歩いた。
たゞ一瞬一瞬心から
踏みしめて歩いた。

私はやはり
良い途を歩いたのだらう。
荊棘の刺にさゝれたけれど――。
石のかけらにも躓いたけれど――。

北原白秋[一]

（一）詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生れた。邪宗門、洗心雜話、季節の窓、白秋全集等の外に民謡、童謡集の著もある。

四　童心

聖心は童の心である。
越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつたかういふ話がある。

一に童男、童女、二に手毬、三にお彈き。これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛樣がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶ事が、またどんなに嬉しかつたかゞ思はれる。

その良寛樣も、子供たちには隨分ばかにされて、盛んにぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊んでゐた良寛樣が有難い。

或時、例の通り、子供たちと隱れんぼをしてをられた。鬼になつた良寛樣が目を瞑つて、「もういゝよ。」と言ふかはいゝ聲を、一心に待受けてをられる。と、丁度、日の暮時で、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら〳〵點きだすと、

子供たちは急に遊を止めて、一人殘らず、こそ〳〵と歸つてしまつた。其所は子供だから、良寛樣も何もうつちやらかしである。無論いくら待つても「もういゝよ。」と言ふ者はない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうしてとう〳〵夜が明けてしまつた。良寛樣はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ所に、同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてをられた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それからまた或時の事である。良寛樣が今度は隱れる事になつた。其所で見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐりこんで、それはかはいらしい事だ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠の樣に、頭からすつぽりと稾を被つて、おど〳〵してをられた。すると子供たちは、また例の通り、一人殘らずこそ〳〵と歸つてしまつたのである。それを良寛樣は少しも御存じない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が昇り始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛樣が小さくなつて、もぐつてをられる。「おや、良寛樣が。」と言ふと、あわてて、「そつとしろ、そつとしろ。子供が見つける。」

やには

その心のあどけなさ、有難さ、まるで子供である。

また或日の事である。その良寛樣が、男の兒や女の兒たち

とお彈きをしてをられた。(一)沙門良寛全傳に、「禪師頗る大勝を博して、賭物のいり豆を多く得。」と書いてあるから、餘程ののり氣であつたらしい。丁度その時誰かゞはいつて來た。そして「おや〳〵良寛樣、なか〳〵あなた樣はお彈きが御上手で。」と褒めると、罪がない事、良寛樣はぽうつと面を赤くなさる。まるで少女の樣に、さも〳〵恥づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隱したといふ。その心の初々しさ、そのきまりのわるさ、恥づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく、身を謙(りくだ)る心である。尊い聖心はすべてこの童心を源にする。

もう一つお話する。

(一)西郡久吾編。北越偉人沙門良寛全傳。大正三年東京目黒書店發行。

或時、赤々と實がうれて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さい子供が一人泣いてゐた。良寛樣が通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいと言ふ。「よし〳〵、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。」と言ひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全く旨さうな柿の實だ。一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの。良寛樣は夢中になつて、嚙るは〳〵、まるで猿蟹合戰の赤いお猿の樣に、むしや〳〵と食べてゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見て火の樣に泣叫ぶと、始めて良寛樣も氣がついた。さあしまつた。これはといふので、あわ

てて枝を搖つたといふ話。思うてもそのあわて方のをかしさ、罪のなさ、眞正直さ、その子供らしさ、全く涙がこぼれる程嬉しいではないか。

禪師の玉の様なこの童心は、秘藏といつた童の昔からそのまゝである。それは何物にも替難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたと言ふ、或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。其所でまた〳〵叩かれた。「親を睨む様な奴はかれひになるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ家内中大心配で、あちらこちらと搜し索めると、或濱邊

天稟

上目

（鰈）

の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。「榮坊どうした。」と言ふと、榮坊いはく、「おらまだかれひにならねえか。」

かれひになると言はれたので、本當にかれひになると思つて、一心に海を視つめて顫へてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本と言ふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

——洗心雜話——

悄然

生一本

自修文

空中習字

相馬御風（一）

良寛和尚の書のいかにすぐれたものであるかに就いては、今更くだ〳〵しく述べるまでもなく、廣く知渡つてゐる。この良寛和尚の習字法に就いて、極めて面白い逸話が越後の人々の間に

（一）詩人、評論家、名は昌治。明治十九年新潟縣に生れた。良寛坊物語、眞心と千代と蓮月、郷土に語る等の著がある。

語り傳へられてゐる。それはかうである、

或時俳人の坡丈(一)といふ者が、良寛和尚の草庵を訪れて、こんな事をたづねた、

「良寛樣、私はどうも字が拙くて困りきつて居りますが、何とかして字の巧くなる工夫はないものでせうか。」

すると良寛和尚は言下に問返した、

「お前さんは字を巧く書きたいと思ひなさるのかね。」

坡丈は答へた、

「無論です。それだからこそ、かうして御教を願ひに參つたのです。」

和尚は笑つた、

「それだからいけない。自分がろくな字も書けないくせに、どうかして他人に巧いと思はれる樣な字が書きたいなどといふ

言下に　先方の言葉が終るや否や。

(一)傳不詳。

料簡を持つてゐる。それがいけないのだ。それだから拙い字が出來るのだ。そんな考は一切捨ててしまひなされ。巧い字や、美しい字や、上手な字を書かうなどといふ考は一切捨ててしまひなされ。さうしたら少しは字らしい字が書けようといふものだ。」

料簡　了簡とも書く。かんがへ。こころ。

「成程。」と坡丈は思はず膝を打つた。

そしてそれから坡丈は樂に字が書ける樣になり、隨つて字に趣が出て來る樣になつたといふ事である。

良寛和尚は更にこんな事を或人に語つたとも傳へられてゐる、

「手習をするなら、空中にするのが最もよい。毎朝早く起きて、顏を洗ひ、神佛の禮拜を濟ませた後で、家の外へ出て、大空を仰いで立つ。そして、右の手を出來るだけしつかりと空に向つて伸

天地玄黃　習字の手本によく用ひる千字文の初の語で、天は黑く（玄）、地は黃いろい意。

す。その手で空中に字を書く。さうすれば、どんな大きな字でも自由に書ける。自分の名でもよい。一の字でもよい。天地玄黃でもよいどんな字でも書く。毎朝書く。大空の涯から涯までの字を書く。どんな大きな字でも書ける。どんなにでも自由に書ける。これが卽ち空中習字といふ妙法ぢや。この空中習字の妙法を毎朝續けてやれば、必ずいゝ字が書ける樣になる。いゝ字が書けないまでも、心がそのお蔭をかうむる。わしはそれを何年となく毎朝やつてをるのぢや。」

成程、これは妙法である。私もその話を聞いてから、時々その空中習字をやつてみる。何とも言ひ樣のない爽快さを覺える。わけて淸らかに澄渡つた秋の朝の大空に向つてそれをやる時などは、全くたまらない爽かさを覺える。かうしてせめて一日に一度だけでもその樣な寬やかな、爽かな、のび〳〵した朗かな氣持に

なる事を續けて行く事は、私たちに取つては確かに貴い心の養である。

五　平泉より

吉田絃二郎[一]

偶然にも昨日は芭蕉忌[二]に當つてゐた。北に進むにつれて山の雪は深く、かゞやいて行つた。

那須野の荒寥たる、伊達[三]も黑塚[四]のあたりも、唯曇りがちな月明りの下に杳然として連なつてゐた。

奧[五]の細道に據れば、芭蕉が日光に詣拜したのは四月朔日[六]になつてゐる。それから行を起して白河[七]を越え、黑塚の岩屋を見、飯塚[八]の里に佐藤庄司[九]が舊館を訪うたのは早苗取る頃

(一)小說家。明治十九年佐賀縣島に生れた。霧島紀行、草の秋、白雲飛ぶ、吉田絃二郎全集等の外數多の小說、感想集がある。

(二)芭蕉の忌日、十月十二日。芭蕉は江戸時代の俳人。伊賀の人。姓は松尾。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

(三)福島縣（岩代國）伊達郡大木戸村字大木戸。

(四)同縣安達郡大平村。此所に昔鬼の棲んだといふ岩屋がある。

(五)元祿二年芭蕉が奧羽地方から北越地方を旅行した時の紀行文。

(六)元祿二年。

であつた。

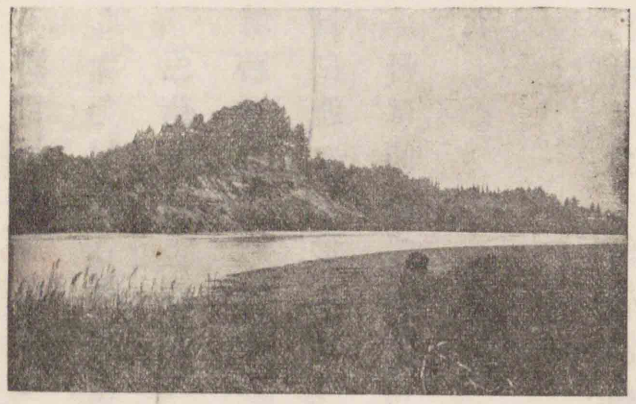
私はカバンの中から奥の細道を出して讀みながら、月の下の黑い山や、地の涯の明滅する町の燭を拾うてゐた。全く東北の旅は落寞たる感じを呼起す。走れども〳〵冬枯の野ばかりである。

名取川は月の下に白く流れてゐた。

奥の細道で畫工加右衛門といふ男を「風流のしれ者」と芭蕉は言つてゐるが、今でも仙臺にはそんな人が住んでゐる樣な氣がする。寒い夜の風に吹かれながら歩いてゐると、仙臺の町は田舍の京都と言つた感じがする。地方に行つて、落著いたのびのびした町を歩くのはいゝものである。

(七)白河の關。福島縣（磐城國）西白河郡古關村大字旗宿にあつた。
(八)同縣信夫郡飯坂町。溫泉で名高い。
(九)信夫庄司佐藤元治。繼信、忠信の父。
落寞　冬枯
(一)宮城縣の中部を東流する川。長さ五十キロメートル。歌枕として名高い。
(二)芭蕉は五月五日仙臺に入りこの人の所に一泊した。
しれ者

一の關の北に城跡らしい丘がある。確かに城跡であらう。杉の木立に包まれた古刹がある。此所に來れば既に平泉の面影を留めてゐる。


高館下の北上川

南すれば冬の田を隔てて平泉の山が寒げに迫つてゐる。

光堂のあたり、唯二三株の紅葉、散りもせで火の如く燃えてゐるのを見た。

光堂を出て、辨天堂の横から白山社の麓に立てば、崖の下に衣川が横たはり、西してやがて北

(一)岩手縣西磐井郡一關町田村氏の舊城邑、古刹
(二)岩手縣西磐井郡平泉村。東北第一の古蹟。藤原氏居館當時はその繁華に京都に擬せられたといふ。
(三)金色堂のこと。天治元年（一一二四）藤原清衡の建立。張つてあつて光堂と言ふ。内外金ばくを以てあつて光堂のこと。
(四)辨財天堂のこと。光堂の西北。國寶曼荼羅が陳列されてゐる。
(五)平泉の北を流れる川。下流に義家、貞任の故事で名高い衣川柵の址がある。

上川と結び附いてゐるのを見る。

滿目眞に蕭瑟である。日本の涯かとも思はれる程のわびしさを見せて、唯低い山のみが雪雲の下に連なつてゐる。

芭蕉をして「義勇忠孝の士なり」と歎稱せしめた泉三郎の城跡は、左手に琵琶の柵の痕を殘して、空山いたづらに冬の日に連なる形である。

日は傾いて來た。ぱら〳〵と落葉を打つて雪が降つて來た。

(六)奥羽、北上兩山脈間の廣い縱谷の水を集めて仙臺灣に注ぐ。長さ三六九キロメートル。

蕭瑟

(一)名は忠衡。藤原秀衡の三男。

(二)中尊寺の西北山麓にある。

六　幼帝の御仁慈

「信成、々々。」

お目覺めあそばされたばかりの御幼少な高倉天皇は、御召物を召される間も遲しと、お側仕の藤原信成をお呼びになつた。

「はつ。」

聲と共に伺候した信成の顏色は、今朝は何時もの樣に晴れ晴れとしてゐなかつた。其所には何かさばきを受ける罪人の樣なおど〳〵しさが窺はれた。

「もはやお目覺で……。何時もながら御機嫌うるはしう。」

信成は恐る〳〵朝の御あいさつを申し上げた。

「信成、楓は……。」

天皇には信成の言葉も御耳に入らぬ樣、急きこんでお尋

(一)第八十代。

(二)歌人。官は參議に至つた。

伺候

おど〳〵しさ

(挨拶)

鍾愛

仕丁

拘禁

ねあそばされた。

楓――それはさきに臣下から獻上された物で、樹はさう大きくはなかつたが、をりからの霜に染めなした紅葉の美しさは、類ないまでに鮮かであつた。天皇の御鍾愛は一方ならず、特に藤原信成に命じてこれを守らせられ、夜明を待ちかねさせられては、日毎に御鑑賞あそばされるのが、近頃のこの上ないお慰みであらせられたのである。

その楓が、實は今朝信成が何時もの樣に見廻ると、お庭掃除の仕丁たちが、酒を煖めるとて、物もあらうに、その楓の枝をうち折つて焚いてゐたのである。驚いた信成は、取敢へずその仕丁たちを拘禁して置いたが、特に楓の守を命ぜられてゐた信成の役目の越度は免れない。楓に對する天皇の日頃の御鍾愛の深さをよく知つてゐる信成は、その罪の死にも當る事を覺悟せねばならなかつた。今朝の信成の顏色の勝れぬのは、その爲であつた。

「信成、楓は……。」

覺悟の上とは言へ、天皇のこの御言葉は、ひしと信成の心魂に徹した。

「はい、それは……。」

信成はそれ以上言葉を續ける事が出來なかつた。顏色は靑ざめ、身體には微な慄さへ見えた。

「どうぞしたのか。」

失態

「は、はい、身の不注意から……取返しのつかぬ失態を仕りまして……。」

「失態とは……。」

「はい、心なき仕丁どもが、酒を煖めまするとて、あの楓の枝をうち折りましたので……。あれ程堅い御言附を拜しながら信成の不覺……。御詫の致し樣も御座りませぬ。」

不覺

信成は苦しげにかう申し上げると、顏ににじむ汗をそつと拭つた。

「ほう、仕丁どもが酒を煖めるとて。」

逆鱗

逆鱗の餘り、いかなる罪科を仰せ出される事かと、恐懼してゐる信成に、天皇の御聲は意外にも優しく朗かであらせられた。

「は、はい……。」

信成は聖意をはかりかねて、唯畏まるだけである。

「朕も聞きをる。唐詩に

心にくし

林間酒を煖めて紅葉を燒く。(林間煖酒燒紅葉。)(一)

と。誰が教へて、仕丁どもにかくはゆかしい風流をさせたものか……。さて〳〵心にくき仕丁どもぢや。赦してやれ、赦してやれ。」

(一)唐の有名な詩人白樂天の作。

「……。」

惻々

幼帝の御仁慈の深さが惻々と胸に迫つて、うなだれた信成の眼には、思はず感激の涙が溢れた。

天皇の御仁慈は、御成長あそばされるにつれて、一層深く、一層大きくならせられて、(一)皇朝言行錄には、次の樣な話も傳へられてゐる。

高倉天皇、一夜婦人の哭く聲を聞き、人をしてこれを問はしめ給ふ。曰く、「妾が主婦もと貧にして、一衣を製するも極めて難し。今新たに朝服を製して、しかも盜の劫奪する所となる。再びこれを製せんと欲すれば、則ち力辨ずる能はず。妾、以て反命するに辭なし。こゝを以て泣く。」と。その人還り報ず。天皇惻然としてのたまはく、「朕聞く、(二)堯の民は堯の心を以て心となすと。今、朕、不德にして人に盜をなさしむ。これ朕の恥なり。」と。乃ち女子を召してその色樣を問ひ、中宮の御衣を賜ひて、これを遣り給ふ。

(一)二卷。土屋弘の著。我が國の偉人の言行を漢文で記した書。明治十五年刊。

朝服　劫奪　反命す　(二)支那古代の聖天子。　色樣

高倉天皇、一夜婦人哭聲、使人問之。曰、「妾主婦素貧、製一衣極難。今新製朝服、而爲盜所劫奪。欲再製之、則力不能辨。妾、無辭以反命。是以泣。」其人還報。天皇惻然曰、「朕聞、堯民以堯心爲心。今、朕、不德使人爲盜。是朕之恥也。」乃召女子問其色樣、賜中宮御衣、而遣之。

七　訓言五則

一　人を責むること勿れ

人不善ありとも怒りて强く憎み責むべからず。我が不善を知らば强く責め修むべし。强く人を責めざれば人の恨な

し。我が不善を強く責むれば我が身に益あり。己をゆるして人を責むるは大なる僻事なり。人の恨ありて我が身に益なし。

—初學訓—

僻事

二　人の行に長短あり

人の性行には、短なる所ありと雖も、必ず長ずる所あり。人と交遊するに、若し常にその短を見てその長を見ざれば、則ち時日も同じく處る可からず。若し常にその長を念ひてその短を顧ざれば、終身これと交遊すと雖も可なり。

人之性行雖有所短、必有所長。與人交遊、若常見其短而不見其長、則時日不可同處。若常念其長而不顧其短、雖終身與之交遊可也。

—世範—

三　得たる所得ざる所

人の得たる所を以て得ざる所を信ずべからず。一事得たりと雖も、他事には得ざる事あり。また得ざる所を以て得たる所を疑ふべからず。一事得ずと雖も、他事に得たる事あり。我が得たる所を以て人の得ざる所を謗る可からず。これ恨をとる道なり。

—大和俗訓—

四　人の長短

我當に人の長所を視るべく、人の短所を視ること勿らん。短所を視ば、則ち我彼に勝るとも我に於て益なし。長所を視ば、則ち彼我に勝り、我に於て益あり。

我當視人之長所、勿視人之短所。視短所、則我勝彼於我無益。

視長所則彼勝我於我有益。

——言志錄——

東照公嘗て言へらく、「人を用ふるには須らくその長ずる所を取るべし。これを耳、目、鼻、口各司どる所ありて以てその用を濟すに譬ふ。鵜は水に入りて以て魚を得、鷹は空を搏つて以て禽を得。人各長ずる所あり、備るを一人に求むることなかれ。」と。

東照公嘗言、「用人須取其所長。譬之耳、目、鼻、口各有所司以濟其用。鵜入水以得魚、鷹搏空以得禽。人各有所長、勿求備於一人焉。」

——皇朝金鑑——

五　長を取り短を捨つ

人に一つの善き事あらば、必ずそれを取るべし。桓公曰く、

(一)德川家康の諡號。

(二)支那の春秋時代の齊の國の君主。

人主

(一)明代の學者。名は琦、敬軒と號した。文清は諡。進士となり、翰林院學士に至つた。

干將莫邪の劍

隋侯の珠

魚鼈

上工

「人の小惡を以て人の大美を亡ふ。これ人主の天下の士を失ふ所以なり。」(以人之小惡亡人之大美。此人主之所以失天下之士也已。)と。今の世に一つの長所ある者稀なり。ましてや一人にて兼備へたる者あらんや。薛文清の語に、「人を用ふるに、當にその長を取りてその短を舍つべし。若し備るを一人に求めば、則ち世に用ふべき才なからん。」(用人、當取其長而舍其短。若求備一人、則世無可用之才矣。)とあり。干將莫邪の劍、利しと雖も、草を刈るには鎌に如かず。虎象猛しと雖も、鼠を取る事は猫に如かず。隋侯の珠、重き寶なれども、鳥を擊つには泥丸に如かず。猿よく木に登れども、水に入りぬれば魚鼈に如かず。人の性行、短き所ありと雖も必ず長き所あり。古語に、上工

は材を選ばずといふは、よき匠は長き木、短き木、共に集めて捨てず。長きをば長きを用ひて宜しき所に使ひ、短きをば短くして足れる所に使ふ。人も得たる所に用ふれば誠に益あり、得ざる所に用ふればあるにかひなきなり。長短を選ばずして漫りに人を捨つるは、鷹に魚を取らせ、鵜に鳥を取らせて、用に立たずと言ふにひとし。

——武士訓——

八　天龍川下り

和辻哲郎(一)

愈舟に乘りこむと、舳先に立つてゐる船頭が、櫂でぱんぱんぱんと舷を敲く。その音が霧を貫いて、水の上を遠くまで響いて行く。出發といふ波立つた心持が、いかにもふさはしくこの響に表されてゐる。この出發は、天龍川下りの全體の中で、最も印象の深い物の一つであつた。

船頭は前に二人、後に二人ゐる。四人とも櫂を持つてゐる。瀨の所に來ても、二つの櫂で船を操縱する。一二箇所の瀨を下ると、すぐに天龍峽にはいつた。霧の中に兩岸に切立つた山が見える。下方は全部巨巖である。その間を船は一時間約七八海里の速力で下つて行く。河幅は狹いが水量が多いので、急流である割合に危險な氣持がしない。それよりも、寒さと、時々舷を越えて來る飛沫とが氣になる。兩岸の巨巖は實に澤山ある。「勿體ない。」「贅澤だ。」といふ言葉さへ使ひたいくらゐに。紅葉はもう色が褪せかゝつてゐるが、霧の間に隱見す

(一)哲學者、批評家、文學博士。京都帝國大學教授。明治二十二年兵庫縣に生れた。ニイチェ研究、偶像再興、古寺巡禮等の著がある。

飛沫

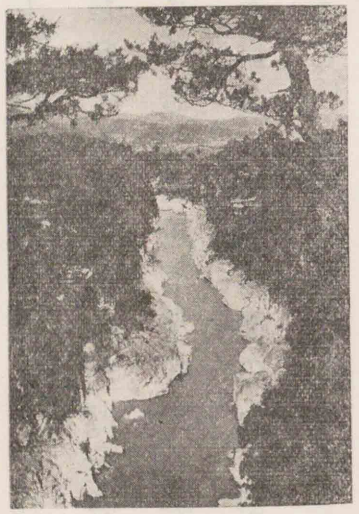
る所は誠に佳い。愈、天龍峽にはいると、皆は「來てよかつた。」と言つたが、さういふ景色が、絶えず變化しながら何時までも續く。過去つて惜しいと思ふ隙もないくらゐに、後から後から現れて來る。

それが一時間も續いたであらう。受けた印象の量から推せば、可なり長かつた。人々はもう天龍川に親しみを感じて、曾て難船があつたといふ茶々淵に來ても、大して難所らしく思はなかつた。難所に來る毎に、先頭の船頭はぱん〳〵と舷を敲いて警戒する。そのぱん〳〵といふ勇ましい響を待つ樣な氣分にさへなつた。

始めて山が開けて村が見えた。橋があつた。その橋の下流

落差

に櫓の瀧と呼ばれる天龍第一の難所がある。餘り長くもない瀨ではあるが、三丈三尺の落差があるといふ。舟は矢の樣に流れて行つた。舟底はがら〳〵と石にぶつつかる。飛沫は容赦なく飛びこんで來る。しかし、船頭は櫂で巧に舟を導いて行く。下の淵に突進んだ時には、舟の舳先はもう岩を避けてゐる。この難所を通つたのは、午前七時半頃であつた。



天龍川上流

その後は追々山が開けて、村の見える事が多くなつた。霧も晴れた。畑が見える。竹藪が見える。河原があるが、迫つた山

の間を拔けて、穩な村の景色を見、やがてまた迫つた山の間へとはいつて行く心持は、自分に取つては、天龍峽よりも却つて好かつた。かういふ所にも人が住んでゐる。さうして激しい自然と戰つてゐる。それを眺めてゐると、長く〳〵流れて行く天龍川の心が、自分の胸にも通つて來る。その自然と、さうして人間――人間の姿は、此所にも見られるではないか。自分は河原の砂の上で遊んでゐる子供の姿を見て、涙ぐましい心持になつた。

天龍川としては、信濃の國境を越える前二時間程の間が、荒つぽく、大きく、天龍の名にふさはしいものであつた。

岸に立つ巨巖はもう見られない。しかし、激しい流が滔々

と流れて行き、その上を、木の葉の樣な舟が水に揉まれながら、まつしぐらに落ちて行く感じは、前には見られないものであつた。このあたりは山の形も餘程違つてゐる。南畫にでもありさうな山が三つ重なつて、突如として目の前に現れたのも、このあたりであつた。

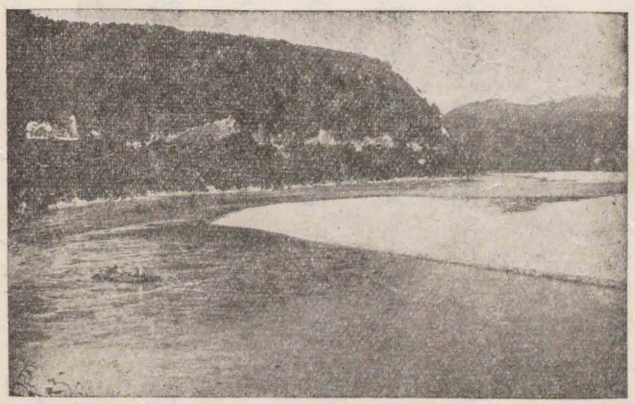
午後一時過、製紙會社の工場のある中部まで出ると、餘程氣分が違つて來る。此所からは山の形もすつかり變つた。地質が別になつてゐるらしい。この後も迫つた山の間を流れて行く事は同じであるが、しかし、暫らくの間は感じが小さくなる。

我々の氣分にも、大分倦怠の心持が加つたが、やがて二時

間も經つと、西川(一)、戸倉(二)といふ樣な、妙に感じの深い村に出る。戸倉の河原では、船大工が巧妙な槌の調子を取つて、船を修繕してゐた。その邊からは谷も開けて、いかにも大河らしい氣分になつて行く。河原も大きい。その荒涼の感じが、丁度迫つて來た夕暮と相應じて、天龍川下りの最後の三時間は、また忘れ難い印象を我々に殘した。稍倦み疲れた氣持で、暮行く山と河とを眺めてゐると、その倦み疲れた氣持が、周圍の景色の中にいかされて

荒涼

(一)靜岡縣(遠江國)磐田郡。



天龍川下流

來る。廣い河原の物寂しさは、丁度我々の心にふさはしい。薄暗くなつて行く水面の何となく味氣ない氣持は、最早我々を乘せて流れて行くのに倦んだ樣に見える。船頭もまた倦んだ。しかし、それでいゝ。やがて月が現れた。それも薄曇の空である。

味氣ない

(一)佛文學者。早稻田大學教授。明治十三年松本市に生れた。佛蘭西印象記、自然讀本、南歐の空、吉江喬松詩集等の著がある。

(二)關東平野の西端に發して、東京府、埼玉縣の西部から山梨縣の長野縣境を劃する深山地帶で、二〇〇〇メートル內外の高峰三十數座を數へる。

九　冬の國

吉江喬松(一)

武藏野の果を限つてゐる秩父(二)の山に、今日は終日灰色の雲がかゝつてゐた。夕方から風が起つて、その雲が吹きちぎられ、寒さうに空の中へ飛び始めた。風はあの山を越えて、野を一面に覆つて吹きまくつて來るのか、見る〳〵其所此所

の林に、藪に、叢に、木の葉、草の葉がばら〳〵と舞出した。空は大方夕日にぼかされて、紅に光つてゐるが、冷い鋼色が上の方からおつかぶさる樣にして、その紅もやがてその中に吸ひこまれてしまひさうだ。

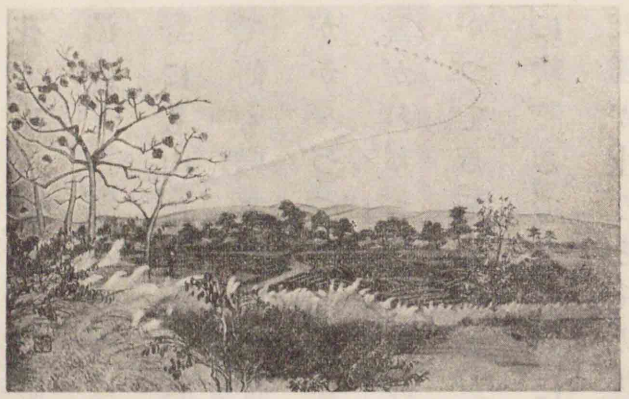
ふと、野に鳴り渡る風の中に響が起つて來た。耳を澄すと、その響は次第に近寄つて來る。黃色に鳶色に枯れた林の中から白い煙が舞ふ。汽車だ。見るうちに次第に姿が現れて來る。煙がちぎれ〳〵に林の上をはひ、響は風に混つて、野に一面に散る。その風の中を、突拔く樣な勢で汽車は走つて來る。近くへ來て見ると、汽車の屋根が白くなつて、上に煤煙が薄く散つてゐる。何だらうと思つてゐると、ぐわうと音がして、

煤煙

小春日和（鵯）

（雫）

目の下の小山の裾を汽車は走り過ぎる。あゝ雪だ。汽車の屋根を雪が薄く覆つてゐるのだ。窓際からは汗のしづくの樣に、ぽた〳〵水が滴つてゐる。そのしづくを振ひ落しながら、汽車は元氣よく走つて行く。——もう甲斐と信濃とは風雪の國になつてゐるのかしら。私たちの鄕土は、風が荒れ雪が舞つてゐるのかしら。さうだ、汽車はその風雪の中を脫れて、今都へ入つて來たのだ。



武藏野（永井白葉筆）

武藏野はまだ小春日和で、百舌が鳴き、ひよが鳴き、竹林が

すがれる

吹きまくる

（一）松本市の南方の原野。天文二十二年（一五五三年）武田信玄は小笠原長時とこの地に戰つて大勝を得た。

戰ぎ、公孫樹が黃金色にひらめき、藪には茶の花や山茶花の花が咲き、野菊や龍膽がすがれてもまだ殘つてゐるのに、信濃はもう溪々峰々に木枯が渡つて、渡鳥の群を吹きまくり、野にも山にも、風の行く手のさはりとなる物は悉く吹飛して、何も殘さない。桔梗ヶ原を廻る四方の山々には何時も雲がかゝつてゐて、雲があがつたかと思ふと、山の中腹まで薄雪が包んでゐる。西の方の山々には毎日の樣に嵐の雲が群がつてゐて、その雲が崩れたかと思ふと、霰をまいて原を横に吹渡るでも夕方になると、西風は忘れた樣に止むのが習だ。風が止むと、その後はいかにも靜かで、枯林の中に立つてゐる野の小家には、爐で焚く火の光が見え出して來る。——

（樺）

（楢）

（欅）

（鶺鴒）

もうそんな景色だらう。

冬の初の山の林は、靜かと言ふよりは寂しい。少し前までは、薄い黃色な丸葉がひら〳〵ついてゐた白かばも、もう梢に一葉も留めてゐない。ならの林、けやきの林、じつとして素直に枝を伸し合つてゐる。霜が厚く置いて、それでも雉子打の獵師が、朝早く通つて行つたものと見えて、一條の草鞋の跡が林の中についてゐる。小山の裾と野との境には、よくくぬぎが立つてゐるものであるが、くぬぎだけは枯葉がこんもりついてゐて、來年の若芽の出る頃までは落ちないものだ。南向の山の裾などならば、そのくぬぎ林にきつと一羽か二羽のみそさゞいがちゝと鳴いてゐるか、さもなくば、群に

はぐれ、嵐の來るのに逃げおくれて、きまり惡さうに羽をばさばさいはせながら、ひよの二三羽がゐる事もある。百舌が高鳴きして、茂みから飛出す事もある。が、山も、林も、鳥も皆騷ぎのあつた後の樣にひつそりして、また何か來る者を待つてゐる樣だ。

やがて雪が來るのだ。

野の家も、畑中の家も、西風に吹きさらされて立つてゐるが、西荒れがひどく荒れたその翌日は、大方雪が舞ふ習になつてゐるので、待設けた樣に、その心構になるのだ。夜の明けないうちから風が荒出す。近い林の枝の打合ふ音も聞える。窓が明るくなつたので起きて見ると、雪が一面に舞つてゐる。まだ取入れの終らない菜や大根が雪に埋れる。——旅人が峠を越えて諏訪[一]の方から來るのも、小急ぎで町の方へ行つてしまふ。夕方近くなると、誰一人路を通る者もない。廣い原の上を、深い山の奥を、遠く續いてゐる林の上を、雪が一面に降つてゐるのだ。

もう山から、林から、野から一面に雪に包まれてしまふ。昨日、木を伐りに行つた松林も雪に埋れてしまふ。何も黑い物とては見られない。こんな雪の中に、果して人が住んでゐるだらうかと思はれるばかりだ。一度降つた雪はなか〳〵消えない。寢雪と言つて、垣根の陰や田の畔などに殘つてゐて、上へ〳〵と降積る。年を越して寒中にでもならうものなら、

(一)長野縣諏訪郡上(下)諏訪町。

烏が群をなして、眞白い雪の上に飛んでゐる。

その風雪の中を、汽車は鄉土の人を載せて、都へ逃げて來たのだ。今頃は新宿(一)の停車場へおりて、電燈の光に目を驚かしてゐる人もあるだらう。日毎夜毎、汽車は都へ〳〵と鄉土の人を載せて送つて來る樣な氣がする。

——現代日本文學全集——

(一)東京市外淀橋町。

一〇　小さい旅人

薄田泣菫(一)

私たちが七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日の樣に雁が渡つた。私たちはそれを見掛けると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹(さを)になれ
棹になつたら鉤(かぎ)になれ

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を涸して叫んだものだが、何時の間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡る事は、よく〳〵人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の丘に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥と言ふと、私は海などを越えて來るあの小さい旅人の、あわたゞしい旅を考へて、何時も、言はう樣のない寂しい旅心地を覺える。

(一)詩人。名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。暮笛集、泣菫詩集、春の外筆等の集、茶話、隨木、蟲魚、大地讚頌等の著がある。

吹きさらし

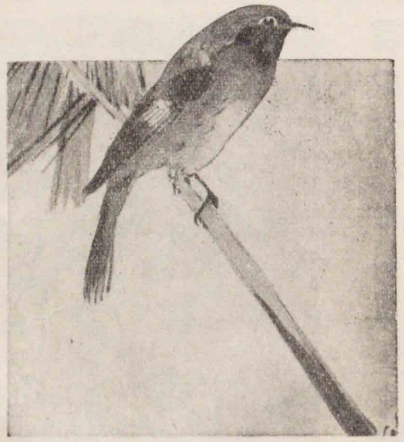
先づ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ〳〵日影が黄色がゝつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると、暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あ、もう秋だな。」と、思はず振返つて見ると、矮小なくぬぎに雜つて、ずばぬけて背の高いにれの木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金の様にきらきらしてゐるのが見える。私たちはその瞬間、言はう様のない強い、健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

百舌

矮小

楡

次にはひたきが來る。山家の午過、だるさうなきり〴〵すの聲も何時の間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやらやつれた人の溜息とでも言つた樣な微な聲が漏れて來て、何の音とも分らないがすると樹蔭のにら畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉の樣に小鳥がついと身をそらして逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。



ひたき

鶺鴒

韮

ひたきと言つたら、まるで悲哀を抱いてゐる人の樣に、大抵は連に離れて、唯一人で出て來る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招く樣に、ひよくり、ひよくりと輕い御辭儀をして、さゝやく樣な聲で唄ひ出す。私はそれを見ると、人の爲、世の中の爲と言つた樣なわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

雀　十　四

ひたきが來てものの十日と經たぬ間に、四十雀が來る。この鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んで來る。山から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもする樣に、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、眩しい程すばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、徹つた銀の鈴を振る樣な聲で、早口にしやべり續けるで、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の產毛そのまゝの雛兒が雜つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返る事もあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育の

もんどり打つ

ませた身振（鰒）

きさく

すばしこい、きさくな魂その物を見る樣な氣持がする。

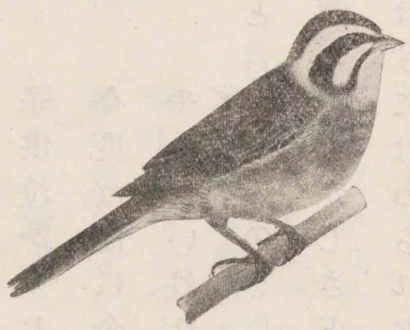
小雪がちらつく頃になると、みそさゞいが來る。これはひたきと同じ樣に、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶ樣にして來る。冬の初の午過、山近い田舍の小家で、爺さんはこたつに潛りこんで、こくり〳〵と居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。

（火燵、炬燵）

煤けた障子に、檐に吊した干菜の影が見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかし

みそさゞい

て絲目が切れて、睡さうな錘の音がぱつたり止むと、こそこそと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまま、また絲を紡ぎにかゝる。さうする間に、鳥は舌打をする樣な聲を立てながら、ひよい〳〵と小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと、狹苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それがみそさゞいである。



頬白

みそさゞいと後先になつて頬白が來る。冷い雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれ

になつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の鳴聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな火の用心。

今度は便に金十兩、

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみ〴〵世渡のむづかしさと、旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野にはもうそろ〳〵うづらが來、しぎが來る。

（鶉）（鴫）

一一　雁

千家元麿[一]

暖い靜かな夕方の空を、
百羽ばかりの雁が
一列になつて飛んで行く。
天も地も動かない靜かな景色の中を、不思議に默つて、
同じ樣に一つ〳〵せつせと羽を動かして、
黑い列をつくつて、
靜かに音も立てずに横切つて行く。
側へ行つたら翅の音が騷がしいのだらう。
息切がして疲れてゐるのもあるだらう。
だが、地上にはそれは聞えない。
彼等はみんな默つて、

（一）詩人。明治二十一年東京市に生れた。炎天、千家元麿、詩集、枝等の著がある。

心でいたはり合ひ、助け合つて飛んで行く。
前の者が後になり、後の者が前になり、
心が心を助けて、せつせ〳〵と
勇ましく飛んで行く。
その中には親子もあらう。
兄弟姉妹も友人もあるに違ない。
この空氣もやはらいで靜かな風のない夕方の空を選
んで、
一團になつて飛んで行く
暖い一團の心よ。
天も地も動かない靜けさの中を、
汝ばかりが動いて行く。
默つてすてきな早さで、

(一)佛文學者。明治三十一年大阪市に生れた。ミツセ詩集、イプセン戯曲全集等の譯著がある。

(二)Thames. イングランド東南部の川。ロンドンを貫流して北海に注ぐ。長さ約三四〇キロメートル。

(三)tunnel. (隧道)

(四)Rotherhithe. テムズ河の南岸、塔橋の下流。

(五)Wapping. テムズ河の北岸。

見てゐるうちに通り過ぎてしまふ。

——現代詩人全集——

一二　ロンドン市民の父

大山廣光(一)

英國の首府ロンドンは、霧の都と言はれるくらゐに、濃霧を以て知られてゐる。それで此所の市民が霧に惱まされる事は一通りではない。中でもテムズ河(二)の渡船は、その濃霧の爲に衝突したり、顚覆したりして、度々慘劇を演じてゐた。それ故、テムズ河の河底トンネル(三)の開通は、ロンドン市民年來の願であつた。

西暦一八〇二年にテムズ河の兩岸、ロザーハイス(四)とワッピ(五)

ングとの間に河底トンネルを掘る計畫が立てられた。しかし、その時は土龍の樣にこつ〳〵と土を掘つて行つたから、その工事は少しも進まなかつた。その上に或暴風雨の夜、大崩壞が起つて、七箇年の苦心と、數百萬圓の資金とが、空しく泥水中に消えてしまつた。それ以來ロンドンの市民は、この工事を不可能の工事とさへ呼ぶ樣になつた。

(一) チャタム造船所の傍の古材木に、疲れた身體を休めた若い

(一) Chatham.

濃霧のテムズ河

(一) ブルネルは、じいつとテムズ河の流を眺めてゐた。うら寂しい秋の黄昏時である。ブルネルの義兄は、河底トンネル工事の犧牲者の一人であつた。あの暴風雨の夜、義兄が慘死した時、ブルネルは歎き悲しんでゐる姉に向つて、「兄さんの復讐はきつと私がして見せますよ。」と言つた。この時復讐と言つたのは、取りも直さず、テムズ河底トンネル工事の完成である。が、ブルネルは、土龍の樣にこつ〳〵掘つてゐるのでは、何時まで經つても工事が完成しない。それには、何よりも先にトンネル開鑿機を發明しなければならないと思つた。それ以來ブルネルは、晝は工場で職工として働き、夜は自分の家で開鑿機の發明に寢食を忘れてゐたのであつた。

(一) Sir Marc Isambard Brunel. イギリスの發明家技師。フランスに生れた。印刷機編物機械等を改良發明した外、橋梁や浮橋の設計をした。（西紀一七六九—一八四九年）

別鑿機

或日の事、夕暮が迫るに隨つて、テムズ河には何時もの樣に霧がこめて來た。濃霧は見る〳〵うちに物象の姿を消してしまつた。と、突然河上で大音響と共にもの凄い叫聲が起つた。渡船と貨物船とが衝突したのである。數名の乘客は水に流されたが、濃霧の爲にそれを救ふ事も出來ない。忽ちその人たちは水に呑まれてしまつた。

「呪の濃霧――」と、ブルネルは思はず叫んだ。それと共にまた彼は、今自分が腐心してゐる事業の貴重な事を、しみ〴〵と感じないではをられなかつた。「私はロンドン市民の幸福の爲に、是非河底トンネルを完成しなければならない。」と、彼は更に堅く決心した。が、これは考へれば考へる程、困難な事

腐心する

業である。何時の日に完成される事か、それは神でなくては豫言出來ない。しかし、ブルネルは義兄の死を思ひ出しては、弛む心に鞭を當てた。

をりもをり、この時ブルネルはぱらぱら、ぱら〳〵といふ音を耳にした。「はて何の音だらう。」と、じつと耳を澄すと、その音は足もとから起つて來る樣である。よく檢べてみると、落葉の上に細かい木の屑が落ちてゐる。彼は夕明りに透して、古材木を檢べた。すると一匹の蟲が木の孔から出て來た。

「これはいゝものがあつた。」この時ブルネルの頭には、突如

慘澹

朦朧

能率

として一つの考が閃いた。「こんな小さな蟲が材木に孔をあける。――それは私がテムズ河の底に穴をあけようとするのと同じではないか。」と。そこで彼はその船食蟲を拾つて、その動作や構造を詳細に研究し始めた。さうなると、彼にはもう書もなければ夜もない。遂に彼は船食蟲の材木を食破る動作を基本として、一つの開鑿機を造つた。しかし、最初はどうも理想的な物が出來ず、組立ては崩し、崩しては組立て、慘澹たる苦心の結果、それから五年目に漸く實用的な物を造り上げた。

その五年間、彼は生活費を稼ぐ爲に晝は工場に通つたが、夜の過勞の結果、頭が朦朧として能率があがらず、その爲に工場を追はれた事も屢あつたが、一八一八年の三月、とうとう彼は蜂巣型トンネル開鑿機を完成したが、苦心の蜂巣型トンネル開鑿機の完成も、ブルネルに取つては、本來の事業の一部分に過ぎなかつた。それを應用してテムズ河底トンネル工事を完成するのに、彼は尚十八年間の苦心奮鬪を續けなければならなかつた。

一八四三年、ブルネルに依つてテムズ河底トンネルは始めて開通した。それ以來渡船は廢止され、隨つて濃霧の時の慘害もまた全くなくなつた。そして彼は今日も尚「ロンドン市民の父」と仰がれてゐる。

――新編偉人物語――

(一)實業家、工學博士。明治元年山口縣に生れた。
(二)West Orange. アメリカのエセックス州の都會。西紀一八八七年以來エヂソンは此所に研究所をもつてゐる。
(三)Thomas Alva Edison. アメリカの科學者、發明家。主な發明は蓄音機、無線活動寫眞、無線電話、炭素、白熱燈等で、實に一千種以上の特許を得てゐる。(西紀一八四七—一九三一年)
(四)bell. 署名帳 めい〳〵の姓名を書いた帳面。有名無名の人名高い人とさうでない人。

自修文

エヂソン

中原岩三郎

大正八年の十二月、私はウェスト・オレンジにあるトーマス・エヂソン翁の研究所を訪れた。發明王エヂソン、人類の恩人エヂソン——エヂソン翁こそ、電氣研究者としての私が、一生に一度でもよいから會つてみたいと思つてゐた人である。研究所の事務所のベルをぐつと押すと、若い書記らしい男が出て來た。

「御用は……。」

「エヂソンさんにお眼にかゝる御約束で……。」

訪問者の署名帳を繰つて見ると驚いた。學者、政治家、實業家等、世界のあらゆる方面の有名無名の人の名が、よくもかうまで集つたものだと思はれる程、ずらりと肩を並べてゐる。

「はあ、御面會ですか。先生は今晝寢の最中ですよ。えゝ、この奥に寢てゐるんです。もうすぐお目覺めでせうから、それまで暫くの間、研究所の方を御案内致しませう。」

エヂソンの生命は研究だ。翁は研究の世界の外には、殆ど一歩も踏出さない。そして發明は翁の生命の糧だ。夜でも晝でも、研究に疲れて來ると、翁は事務所に備へ附けられたベッド(一)の上に、無造作にごろりと横になつてしまふ。夢幻の間にふと湧起るインスピレーション(二)——それが、或はエヂソン翁の偉大な發明のヒント(三)になつた事があるかも知れない。それとも翁は、唯精力の泉を、しばしの睡眠に求めるのだらうか。

エヂソン

「さあ、どうぞこちらへ。」

研究所と言つても、案内された所はまるで大工場だ。モーター(四)

研究の世界の外には云々 研究以外の事は一切しない。
(一)bed. 寢臺。
(二)inspiration. 神の靈を吹きこまれでもした樣に感ずること。靈感。
(三)hint. 暗示。
(四)motor. 電流で廻轉運動を起す機械。電動機。

目まぐるしい　目ざはりになつてうるさい程な。

うち見た所　ちよつと見た所。

のうなり、機械の目まぐるしい動きのうちに、三十人からの翁の助手と、大勢の職工とが、油にまみれて働いてゐる。研究所をぐるりと一巡りして、元の事務所に歸つて來ると、腕時計は一時間たつぷり廻つてゐた。

エヂソン翁はやつと目を覺して、私を迎へてくれた。七十四五歳だつたらう、四角な、平べつたい顏で、灰色の目が鋭い。だが、うち見た所、平和な、もの靜かなお爺さんだ。質素な黑つぼい背廣服が、一層翁の人がらをゆかしく見せる。

翁に會ふ前、私は有名な電氣學者スタイメッツ博士(一)にも會つたが、博士と翁とではまるで感じが違ふ。スタイメッツ博士は純然たる理論の大家といふ氣がしたが、エヂソン翁は決して學者肌の人ではない。翁は理論家ではない。實驗の方からこつ〳〵と叩き上げて來た人といふ感じだ。翁の驚くべき大發明は、晝も夜も殆

〔一〕Joseph A. Ilison Steinmetz. アメリカの科學者。（西紀一八七〇―一九二八年）學者肌の人　學者らしい氣風のある人。叩き上げる　努力してしとげる。

ど一瞬も弛みのない研究、書物の上から割出すのではなくつて、實驗の上に實驗を重ねた結果、完成されるのであらう。電燈、活動寫眞、蓄音機、その他數へ切れぬ程の發明は、恐らくみんなかうした翁の天才的頭腦と、尊敬すべき努力の「手」とから生れ出て來たのであらう。

「今何を研究していらつしやいますか。」

と問ふと、

「蓄電池の研究をやつて居ります。」

と答へた。

これは翁の助手から聞いた話だが、翁は研究に沒頭すると、時間も、食事も、何もかも忘れてしまふとの事。エヂソンの全精力は、その時唯研究の一點にのみ集中されて、その頭腦は神の樣に働き出す。エヂソンはもう完全に「發明の世界」に融けこんで、この一

割出す　もとづいて考へ出す。

沒頭する　もつぱらその事にたづさはる。熱中する。

個の小さい人間は、こつ〳〵と、限りない宇宙の神祕の謎を、綿密な科學の力で解きほぐさうとする。此所に發明界の巨人エヂソン翁の姿が躍如とする。

正午のサイレン(一)が高らかに鳴響く。しかし、エヂソンはパンも水も忘れ切つて、唯無意識に机の引出から煙草を取出して、傍からは、やけに見える樣に吸ふ。研究所の近くの自宅から、奥さんが迎へに來る。

「御飯で御座いますよ。」

エヂソンはやつと我に返る。夕方になる。黄昏の帳が窓を包んで、電燈がぱつと一時に輝く。エヂソンはそれも知らない。また奥さんが迎へにやつて來る。

「あなた、御飯で御座いますよ。」

奥さんの聲に翁の魂はまた俗界に呼戻される。時間の觀念を

躍如　をどりたつさま。
(一)siren.　號笛。
黄昏の帳が云云　夕暮になつて窓が暗くなるのをいふ。
俗界　發明の世界に對して日常の生活をいふ。
時間の觀念を云々　時間の考がない。時間に左右されない。

超越したエヂソンは、社會の人々がみんな寢靜まる頃になつても、まだ研究を止めない。例によつて奥さんが呼びに來る。

「あなた、〳〵、もうお休みなさいませ。」

エヂソン翁は漸く家庭の人となる。これがエヂソン翁の三百六十五日だ。

私はこの偉大な發明家の幾十年もの撓まぬ努力に、おのづと感謝の念が湧いて、思はず頭を垂れた。

「では御機嫌よう。」

握手を交して門を出て、振返つて見ると、もうエヂソン翁の影はなかつた。その時ふと私は翁の逸話を思ひ出した。

翁が蓄音機を發明した時(一)、翁はそれを抱へこんで、或雜誌社(二)の編輯局にやつて來た。で、社員は早速應接間へ案内して、來意を尋ねた。しかし、翁は一言も發しない。編輯員一同が奇妙に思つてゐ

三百六十五日　日常の意。
(一)西紀一八七八年。
(二)Scientific Amelican.（科學のアメリカ人）といふ有名な通俗科學雜誌を發行してゐる所。

ると、やがてエヂソンは(一)ポケットから小さな機械を取出して、机の上に置いた。そして默つて(二)ハンドルを廻すと、その機械が忽ち大きな聲を張上げて、

「皆さん、これは蓄音機です。皆さんはこれがお好きですか。」

と叫んだ。始めて聞いた機械の聲、――一同はあつと驚いてしまつた。その間にエヂソンは、またもや無言のまゝその機械をポケットに入れて、後をも見ずに歸つてしまつた。

こんな話を思ひ浮べて、私はエヂソン翁も案外いたづら者だと、微笑ましくなつた。さう言へば、今會つたエヂソン翁の面影のうちにも、そんな半面がちらと浮んでゐる樣な氣がした。

――(三)世界人の横顔――

一三　大石良雄　その一

(四)山路愛山

(一)pocket.
(二)handle.
半面　かたつら。片一方の方面。
(三)日本の名士が外國の名士に面會した時の印象を集めたもの。東京朝日新聞社編、昭和五年東京四條書房發行。
(四)史論家。名は彌吉。靜岡縣の人。大正六年歿、年五十四。新井白石、源頼朝、勝海舟等の著がある。

(一)赤穗の城下は早駕籠の爲に大騷となりぬ。(二)江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、(三)早水藤左衞門、(四)萱野三平は直ちに駕籠に乘りて、日に行くこと三十里、五日にして赤穗に達し、變を國老(五)大石良雄に報じたり。長矩自盡の命下るや、(六)原惣右衞門、(七)大石瀨左衞門は更に同じ早さを以て赤穗に達したり。君家事あり、衆情恟々危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たくぶ者なく、しかも溫厚にして庸愚なるが如き大石良

城中會議（尾竹國觀筆）

(一)兵庫縣（播磨國）赤穗郡。城主は淺野内匠頭長矩。
(二)元祿十四年（一三六八一年）三月十四日長矩は吉良義央を江戸城中で傷つけた。
(三)名は滿堯。四十七士の一人。
(四)名は重實。討入の前自殺した。
(五)通稱内藏助。
自盡
(六)名は元辰。四十七士の一人。
(七)名は信清。四十七士の一人。
衆情恟々
門閥
庸愚

器局
光を韜む
隱然
恭順
城を枕にす

雄は、茲に始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穗城中の會議は開かれたり。事情は愈明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衞は良雄と同じく赤穗の家老にして、班は良雄の下にありしが、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は專ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、なるべく溫和に城を明渡さん事を主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、「先づ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめん事を幕府に請ふ

左袒
(一)今大垣市。城主戸田采女正は長矩母方の從弟。
(二)元祿十四年。
籠城
殉死
難に投ず

べし。」と。

越えて二日、城中の會議はまた開かれたり。良雄は前說を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の說に左袒せり。(一)大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふ事の、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。(二)四月十二日大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、靑年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の說を執れり。復讐の說は勝てり。血判に與る者百十餘人、そのうち江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。

道路は淸潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八

血沸く

(一)今京都市東山區。優游自適

四通八達の地

天下の視聽

(二)羽前(山形縣)米澤侯。吉良家の親戚。諜者

日、赤穗城の上より受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日、城は難なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穗藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。

良雄は京都の山科(一)に住して優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて、永住を裝へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏(二)の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護する事に努め、人を遣して吉良氏の邸を守らしめ、且その采邑の人にあらざれば婢僕に用ふる事なからしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

(一)江戸本所松坂町。采邑

(二)長矩自盡の日。

(三)赤穗町大字上假屋。舊赤穗城址内にあつて淺野家三代の菩提寺。

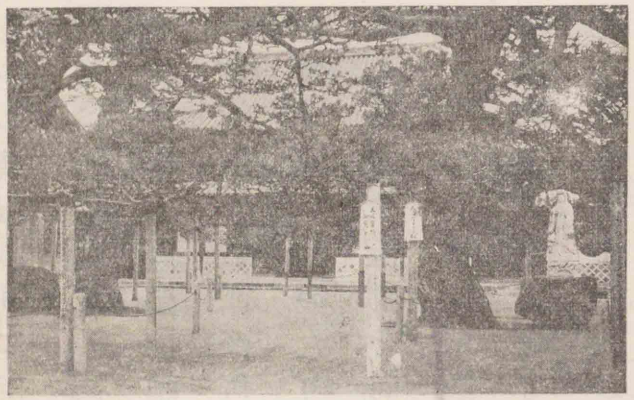
花謝し鶯老ゆ

(四)昔、京都の四條河原で祇園祭禮の日(六月七日)から十二日間行はれた納涼。

破廉恥

誹謗

恬として關り知らず



華岳寺

年は暮れぬ。記憶すべき三月十四日は再び來りぬ。赤穗の華岳寺(三)は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、四條河原(四)の夕涼に都人の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔賣國、破廉恥の誹謗は愈〻良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として關り知ら

ざるものの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。言ふ、「長廣藝州に預けられたり。」と。一縷の望は絶えぬ。この時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣によりて君家の或は再興せられん事を希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等にその眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年夏、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、ひとり長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

(一)通稱忠左衛門。一藩の故老で、良雄に代つて江戸にある同志の統領となつた。

一縷の望　義氣金鐵の如し

(二)石束源五兵衛毎好。但馬豐岡城主京極甲斐守の家老。

(三)通稱主税。

一四　大石良雄　その二

吉良氏の防衛は尚密なりき。彼はその本所の邸を以て卑濕なりとし、これを修補するまで、麻布(一)なる上杉氏の別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。

良雄父子は直ちに江戸に入る事を敢へてせざりき。彼は先づ池上(二)の平間村にありて、吉良氏の動靜を窺ひ、十一月五日に至つて漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵

(一)江戸麻生我善坊。今德川侯邸の一部。

刺客

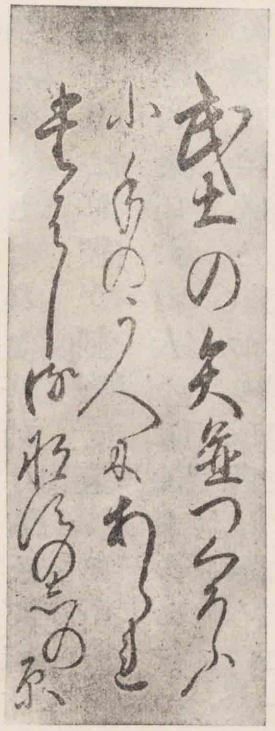
餘命おぼつかなし

一死を賭す

(二)今神奈川縣橘樹郡御幸村字平間。

衞、同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何所より來つて、何所へ去るを知らず、五更に至つて他の一隊と交代せり。流石の吉良氏もこれに氣附かざりき。しかも間諜、探偵すべて功を奏せず、祕密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利(一)に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は卽



武士の矢並つくろふ小手のうへにあられたはしる那須のしの原
五更

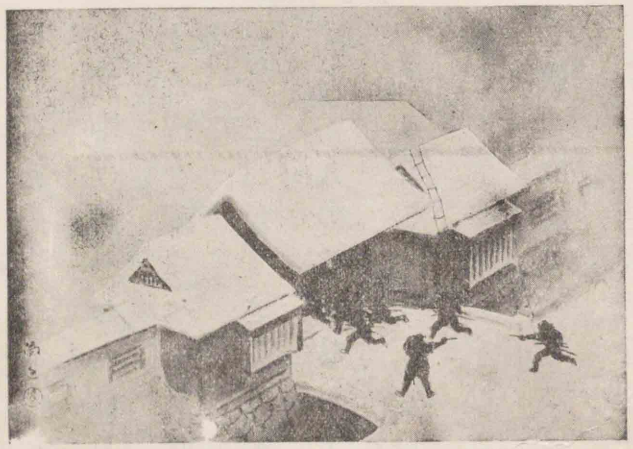
大石良雄筆蹟

(一)通稱勘平。

ち定まりぬ。

翌十四日の朝、良雄は泉岳寺(一)に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事裝束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事裝束せる四十七個の人物は、吉良邸を出去れり。時に雪晴れ



義士討入（小山榮達筆）

(一)今東京市芝區高輪。曹洞宗。

霏々

鬪諍叫喚

て、夜は全く明けたり。蹂躙せられたる邸内の積雪のみ、獨り昨夜の慘劇を物語りをれり。

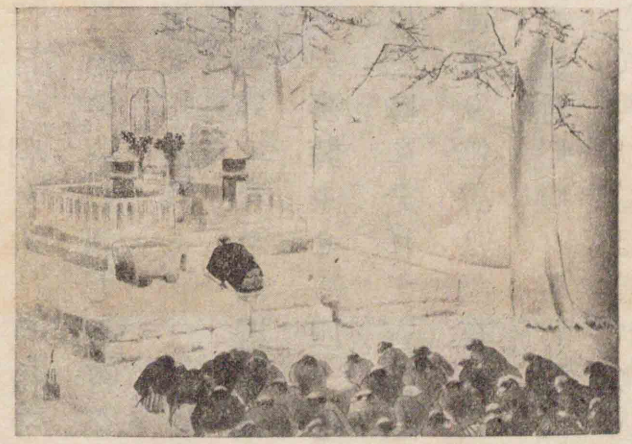
清暉

清暉は輝きわたれり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは城をさして急げり。忽ち聞く、路人の喧噪なるを。始めて知りぬ、赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて、義央の首を獲たるを。

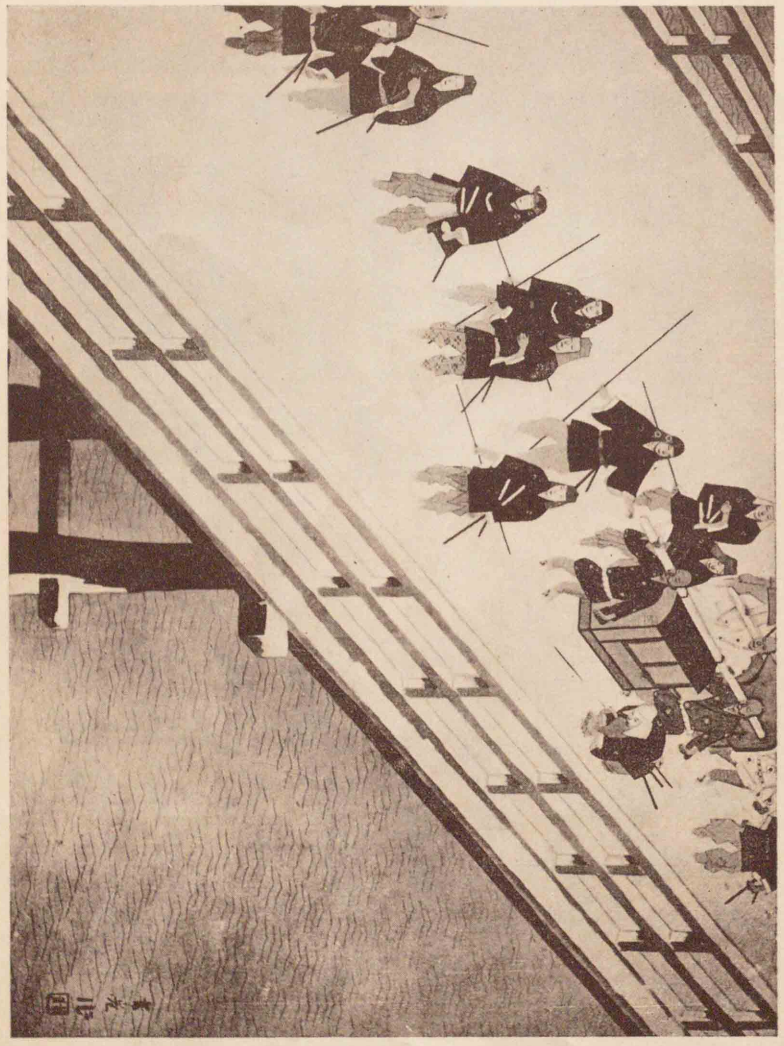
喧噪

風説區々飛語紛々

風説は區々たり。飛語は紛々たり。いはく、吉良氏を襲ひし者は獨り四十七人に止らず、この外尚黑裝束をなせる百二三十人



仇首を墓前に捧ぐ（尾形月耕筆）



義士引揚げ

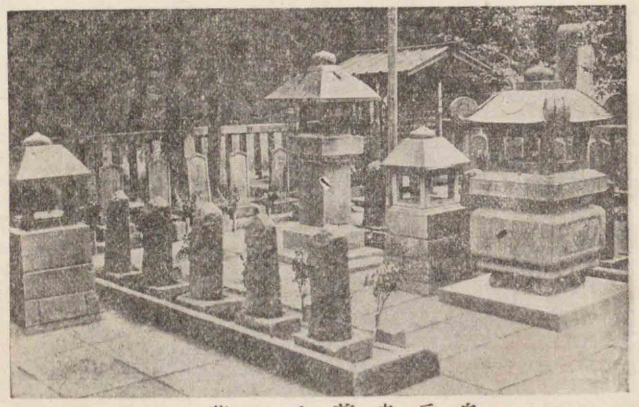
田代古屋筆

(一)通稱助右衛門。
(二)但馬國(兵庫縣)出石の城主久尙。

官裁

ありて、吉良氏の門外を圍みたり。いはく、上杉氏の兵は四十七人を追擊せり、いはく、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。

良雄は吉田兼亮、富森正因(一)を大目附仙石伯耆守(二)の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり言ふ、「上杉氏の衆至る。」と。良雄は同志を警めて防禦の備をなせり。而して上杉

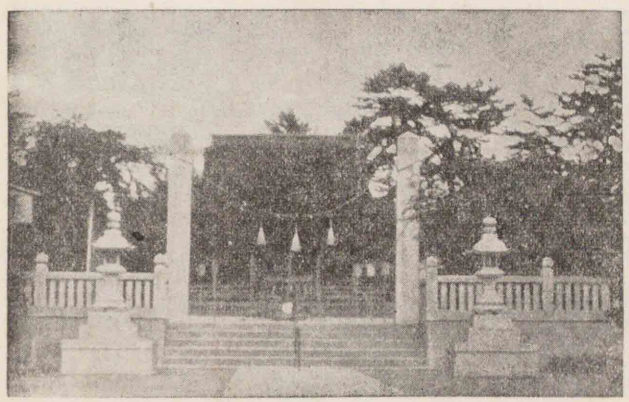


泉岳寺義士の墓

自裁

氏の衆は遂に來らざりき。

この日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。



大石神社

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の杯を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。

溫藉

長者たる品位失墜す

主一 (Stoics.)

良雄は外溫藉にして、內に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち靜めて、騷がしき事を嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛する者にあらず。なすべき事は必ず成遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と、戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品性ありしに由れり。

——愛山文集——

一五　多摩御陵に詣でて

長い間、私は多摩御陵を拜したいと思ひ續けてゐながらその機會を得ませんでしたが、今日はとう〳〵その志を果しました。

中央線の淺川驛(一)で下りるとすぐ甲州街道に出て、東へ約十一二町進み、其所から七間幅の廣い參道を、私は緊張した心持で歩いて行きました。驛から出る乘合自動車もありますが、乘物で御陵近くまで參るといふ事が憚られました。淺川の清流に架けられた南淺川橋を渡つて、北へ進んで行くと、やがて一基の大鳥居を前にして、遙かに高くなだらかな

(一)東京府南多摩郡淺川村。東京の新宿驛から四十二キロメートル。

一基

圓い丘が見えました。これが明治大帝の御治世に次ぐ大正の新時代に君臨せさせ給ひ、御父大帝の御遺業を御繼承あそばされて、世界に於ける我が國の地歩を一層進めしめられた大正天皇(一)の神靈が、永へに鎭まります御陵であります。その御一生は、とかくに御病身であらせられたにも拘らず、歐洲大戰といふ世界的大事變に會して、善く日本の進路を定めさせ給ひ、大正十二年の關東大震災後には、國民精神作興に關する詔を御渙發あらせられ、不測の變に遭つてその趨く所に迷つた帝都の人々を萎靡沈滯の淵から救はせら

大正天皇

(一)第百二十三代。

渙發す

萎靡沈滯

れたその御偉業の蹟をしのび奉つて、私は御陵の前に額づいたまゝ、暫く頭を上げる事が出來ませんでした。心を靜めて拜しまつるうちにも、天皇が葉山(一)に御療養あそばされてゐた當時、今上陛下や皇太后陛下、或は御親子、御兄弟の間がらにあらせられる宮樣方の御動靜が、畏くも下々の家庭にも見られない程の御肉身の御情愛に滿ちさせられてゐた御事など、或は天皇の崩御當時、全國民が、今は心を籠めた御平癒の祈願もかひなくなつた悲しみを胸に抱いて、相共に今更の樣に御聖德の數々をしのび奉つて、慰め樣もない切なさを僅かに紛らさうとした事などを思ひ出して、つい眼頭が熱くなつて來たからです。御斂葬の時に秩父(二)、高松(三)の兩

(一)神奈川縣（相模國）三浦郡葉山町の御用邸。

動靜

斂葬

(一)秩父宮雍仁親王殿下。大正天皇の第二皇子。

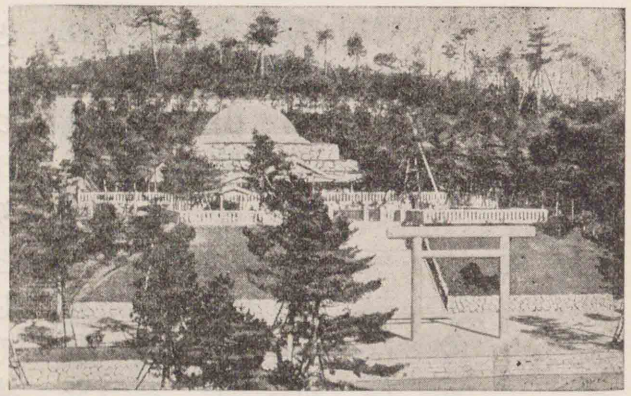
(三)高松宮宣仁親王殿下。大正天皇の第三皇子。

玄宮（佇）

(一)第三十一代用明天皇の皇太子。御名は厩戸。推古天皇の二十九年（一二二一年）薨、御年四十九。

(二)東京府南多摩郡横山村大字下長房。

御兄弟の宮が、玄宮の御前近く御たゝずみになつたまゝ、容易にお立去りにならなかつたと傳へ奉るお話が、またしみ〴〵と回想されました。



多摩御陵

漸くに御陵前を退下して稍遠く仰ぎ見ると、兆域二千五百五十平方メートル、かの奈良時代文化の基を開かせ給うた聖德(一)太子の御墓と御形式を同じうしてゐるといふ御陵の近くには、鬱蒼たる常綠樹林や雜木林を帶びた長房(二)山の丘陵が迫つて、物音一つない閑寂境

の上に、白い雲が浮んでゐます。御陵を後にして前面を望むと、さつぱりとして綺麗な一脈の岡が長く續いてゐますこれは萬葉集に「赤駒を山野に放し」と詠まれて以來、歌の名所として知られてゐる多摩の横山で、今もこの邊一帶の村名を横山村と呼んでゐます。快く晴れた西の空遠く富士ヶ嶺の秀麗な姿が望まれ、近くは紅葉の勝地として聞えた高尾山が仰がれます。私は始めて見るこの眺望、武藏野の名殘も懷かしいこの山川の景勝に接して、うつとりと立ちつくしました。

(一)「赤駒を山野に放しとりかにて多摩の横山かしゆかやらん」(宇遲部黑女)

(二)淺川驛の西南四キロメートル。全山密林に蔽はれ頂上は眺望甚だよい。海拔六〇二メートル。

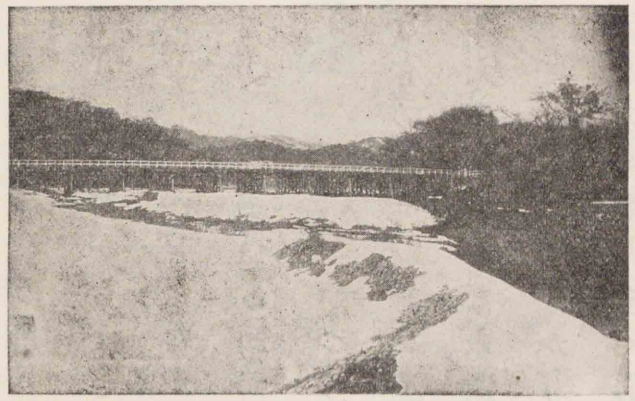
御父大帝の御血を享けさせられて、和歌の道を好ませ給ひ、

ゆたかにも雪ぞつもれる秋津洲
　めぐりの海は朝なぎにして
冬ながらかきねのくさももえいでて
　たなかのいほの梅の花さく
神まつるわが白妙のそでの上に
　かつうすれ行くみあかしの影

などの御秀歌をお遺しになつた天來の詩人であらせられる天皇は、靜かな永遠の御まどろみのうちに、この勝景をいかに御心往くばかり御賞美あそばされてゐる事でせう。御代々の帝都が多く畿内の地に限られてゐた關係上御陵と申せば山城、大和を中心とする地方に定められてゐたのが、

まどろみ

思ひも懸けず奥武藏の地に大正天皇の御陵を拜する事となつたのは、お膝下にゐて御英姿を拜する機會の多かつた天皇をしのび奉る帝都の人士に取つては、せめてもの心賴みでせう。



南淺川橋

歸路に就いて、再び南淺川橋を渡りながら顧ると、御陵の邊はもう半ば黃昏れてゐました。秩父おろしの空風は、橋の袂の尾花を一頻り靡かせて、川の面を吹いて行きます。私はしつかりと襟を搔合せて、橋を離れました。

過去は水に流して行く
手に光明を求む
處世

一六　新年

暦の改ると共に、人は一歳づゝ年を取るのであるが、實際は、その度に生れ變つて、若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それを何時までもくよくよしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行く手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてそれの好機、卽ち年の改る日である。

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあら

ゆる罪を一掃し、汚れた心をうち棄てゝ復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、卽ち我が國民は、一年に二回づゝ心身共に新たになつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれてゐる。就中十二月は、年も新たになる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

其所で我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切の物を新たにし、淸くして、形の上にもこの復活の義を表す事に努めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還曆に入り、古稀に達する老人でも、その生れ變る心持には異なる所がない。

春秋に富む
還曆
古稀

簡樸

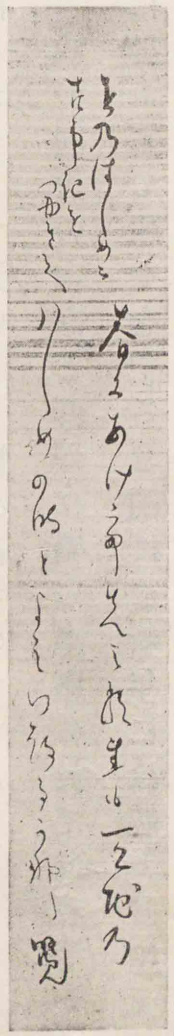
正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩や、讓葉や、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返して行く所に妙味がある。卽ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を掛けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

家宗
四方拜
元始祭
內外臣僚

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同樣に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、また內外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさせられ、御宴を賜ひなどし給ふ。これを思へば、我等は今の世ながら直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずにはゐられぬ。余

は橘曙覽(一)の

春にあけてまづ見る書(二)も天地の
はじめの時とよみ出づるかな



橘曙覽筆蹟

といふ歌を、早くから深く感心してゐた。これ、かの元朝(三)や神代のこともおもはるゝと同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬのである。

(一)歌人。越前の人。明治元年歿。年五十七。
(二)古事記のこと。
(三)荒木田守武の句。

一七　たのしみは

橘曙覽

たのしみは妻子睦ましくうち集ひ
かしらならべて物を食ふ時
たのしみは朝起出でてきのふまで
なかりし花の咲ける見る時
たのしみは常に見馴れぬ鳥の來て
軒とほからぬ樹に鳴きし時
たのしみは物識人に稀にあひて
いにしへ今をかたり合ふ時
たのしみはそゞろ讀みゆく書の中に
われとひとしき人を見し時
たのしみは三人の子供すくすくと
おほきくなれる姿見る時

たのしみは稀に魚煮て子らみなが
うまし〳〵といひてくふ時
たのしみは家内五たり五たりが
風だにひかでありあへる時
たのしみは神の御國の民として
神のをしへを深くおもふ時

――橘曙覽全集――

(一)英學者。第一外國語學校長。文久元年(二)愛媛縣に生れた。無絃琴、聲、人生と趣味等の著がある。

(二)支那の五代の一國で、後の北宋、南宋に分れる。十八主三百二十年で元に滅された。

(三)北宋の第六代の君主。元豐八年(西紀一〇八五年)歿、年三十八。

(四)名は襄。宋の仙游の人。眞面目で議論が正しかつた。また詩文を善くし、書に巧みで、書は當時第一の譽があつた。

一八　神と地獄極樂

村井知至(一)

一　神

宋(二)の神宗(三)皇帝の時、蔡君謨(四)といふ人があつた。非常に髯のいゝ人で、胸のあたりまで垂れる長い厚い立派なものであつた。或時神宗皇帝が彼に向つて、「お前は夜寢る時に、その髯を夜著の中に入れて寢るか、それとも外に出して寢るか。」と尋ねられた。

蔡君謨は突然こんな問をかけられたが、さて自分ながらどうして寢るのか氣が附いてゐなかつた。それでその場はいゝ工合に濁して、その晩家に歸つてから、どうかしらと試驗してみた。

最初、髯を夜具の外に出して寢てみたが、何だか工合が悪い。これは多分中に入れて寢てゐたのだらうと思つて、夜著の中に入れてみると、これもまた何となく變である。其所で一晩中、髯を出したり入れたりして、遂に安眠が出來なかつ

その場を濁す

たといふ。

人には自分で日常やつてゐる事に、何も氣附いてゐない事が多い。知らずにこれをやつてゐる事が多い。蔡君謨の如きはよい例であつて、神宗皇帝から言はれてひよいと氣が附き、さてあわててこれを試みると、その何れであるか、分らぬ樣な事が多い。

顯現

神を知らぬといふ人が、神を知つてゐる者である事がある。かの夕顏棚の下にあつて、親子相樂しく笑ひ興じながら、涼氣を悅んでゐる平和は、神の顯現であるのである。親にも子にも神が宿つて、その神が歡樂無限の世界を現出してゐるのである。しかも彼等はそれを知らない。これを他から「お

狼狽

前には神が宿つてゐるが、その神は何か。」と問はれると、蔡君謨の樣に狼狽するのである。

無知は却つて平和である。安心である。知つて却つてこれに悶える樣になるのは不幸である。けれど、眞の大安心、大立命は、知つて而して元の無知に還るにある。

萬人皆神を有するものである。神は萬人の胸に宿つてゐる。唯それを人が知らないのである。これあるを知つた時、驚きまた狼狽する。けれど眞にこれを知了した時、人はまた元の無知に還つて、元の平和に復するのである。蔡君謨はその髯をいかにして寢るかを知つた時、始めて悠々樂々と眠る事が出來た。これと同樣に、人は我が神を知得した後に、始め

て安らかに世が渡られるのである。

——人生と趣味——

塚原渟柿園[一]

二　地獄極樂

品川東海寺の澤庵和尚[二]は、道德高く、眼識また明らかなれば、諸人尊び敬ふ事限りなし。その頃旗本に水野十郎左衛門[四]といふ者あり。これを聞きて言へるは、「何條澤庵[三]なればとて、いかでさる學德あるべき。人々餘りに尊信して賞めたゝふる故、圖に乘りて樣々の事を言ふならん。我出で會ひなば、頭からやりこめて、なか〳〵口は開かすまじ。」と、常に腕を扼せられけり。さる程に、或日謀らず澤庵に會ひければ、水野てぐすねして問ひける樣、「地獄、極樂は實にあるものかないものか。」澤庵答へて曰く、「我もまた知らぬなり。」水野問ふ、「その有無

(一)歷史小說家。名は靖。舊幕臣。江戸の人。大正六年歿、年七十。最上川、山田源右衛門、北條早雲、伊達政宗等の著がある。

(二)東京府荏原郡品川にある。臨濟宗の寺で、澤庵和尚が台命を奉じて寛永五年（一六二八）に開創した。

(三)臨濟宗の高僧。本名は平宗彭。但馬の人。軍家光の信任が厚かつた。正保二年（一六四五）寂、年七十三。

(四)名は不成之。粗暴で亂暴を恣にし、俠客幡隨院長兵衛を殺し、その徒、結黨して復讐せんとせしに、事寛文四年（一六六四）に聞えて、三年死。を賜はつた。

も知れざるに、後生を願へと勸むるは何事ぞ。」澤庵曰く、「貴所は雨降の日他出せらるゝに、そのしたくはいかにし給ふ。」水野言ふ、「從者に傘をさしかけさせ、合羽を著て、馬上にて出づるなり。」「然らば從者の方々はいかに。」「從者もまた笠合羽にて我に從ふなり。」「然らば晴の日はいかに。」「笠も合羽も用ひぬなり。」「若し急に雨降來らばいかに。」「その用意にとて、雨具籠を持たすなり。」「雨具籠を持たせられても、雨降らざる時はいかに。」「降らざる時は唯持たせて歸るなり。」「降らざるに豫て持たしめらるゝは無益ならん。」水野笑つて、「降ると降らぬとが最初より知らるればその世話はなけれども、知らざればこそ、無益になりてもその籠を持たすなれ。」と言ふ。

時に澤庵曰く、「その義なり。後生を願ふもそれに同じ。地獄、極樂の有無は初よりしかとは知れねども、なしと思ひて若しありたる時ははたと困る故、困らぬ用心に豫てより願ふなり。あると思ひてなき時は、無益になるともせん方なし。」とありければ、我慢の水野も、尤もとて閉口せられけり。

一九　孝子の至情

昔、武則、金助といふ親子があつた。二人ともに近衞の舍人であつた。その頃、賭弓（のりゆみ）と言つて、毎年正月十八日に、右近衞府に屬した右近の馬場で、天皇の叡覽を請ひ奉つて、(一)左右の近衞府、兵衞府の舍人が、晴の弓技を競ふ行事があつた。

叡覽
(一)左近衞府は大内裏の上東門の西南に、左兵衞府はその南に、右近衞府は上西門の右に、右兵衞府は東南にあつた。

世は太平の御代ではあつたが、晴の御前競技の事とて、賭弓に出場する若い舍人たちは、何れも一世一代の妙技を振ふのであつた。

金助も今年はその賭弓に出場する事になつた。老いた父の武則は、今日は唯見物人として、馬場にしつらはれた見物席に畏まつてゐたが、若かつた日の我が身の天晴な弓術を誇としてゐただけに、愛する我が子の弓術に對しても、また人知れず非常な期待をかけてゐた。

さて、競技が進められて、愈、金助の出場となつた。が、その日の金助の出來榮は甚だ不出來であつた。父親は豫想を裏切られた。彼の怒は、その子にかけた期待が大きかつただけに、

しつらふ

老の一轍

矢繼早に

一層激しかつた。我が身の譽をさへ汚された思が、更に怒を煽り立てた。老の一轍はもう人目もなかつた。思ひがけない不結果に悄れ返つて退場しようとする金助を激しく呼寄せると、彼はいきなりけはしく叱責した。

怒に身を慄はしてゐたので、聲もとぎれ〳〵であつた。

「あ、あのぶざまはなんだ。苟くも舍人の職にありながら、あんな事で、一旦事ある場合に、君の御身が護れると思ふか。こ、こゝな未熟者奴が。」

言ふや否や、老父の骨太な拳は、矢繼早に金助の頭上に下つた。しかし、金助は一言も答へなかつた。

後に、この有樣を見た人が金助に尋ねた、

「あの時、どうしてお前は逃げなかつたのか。人には出來不出來のあるもの……、あゝまで打たれるには及ばぬではないか。」

金助は恥づかしげに、しかし、眞心の溢れた面持で靜かに答へた、

「いや、それは私もよく知つてゐます。が、私の打たれたのは、未熟を懲されよう爲ばかりではなかつたのです。若し私が逃げたなら、怒に燃えた父親は、きつと追ひかけて來るに違ありません。年寄られた御身に若し躓きでもして、怪我などあつては大事と、……唯その懸念のみで……。」

これを傳へ聞いた世の人々は、皆金助の至孝に感じ合つ

たといふ事である。

これと趣は違ふが、母の笞を受けて泣いた孝子の次の樣な話が、(一)蒙求といふ書物に載つてゐる。

伯(二)俞過あり、その母これを笞うつ。泣く。母曰く、「他日笞うちしに、未だ嘗て泣かざりき。今泣くは何ぞや。」と。對へて曰く、「他日罪を得て笞うたれしに、常に痛みき。今母の力痛むること能はず。是を以て泣く。」と。

伯俞有過、其母笞之。泣。母曰、「他日笞、未嘗泣。今泣何也。」對曰、「他日得罪笞常痛。今母之力不能痛。是以泣。」

孝子の至情は、時と所とを超えて相通ずるものがあるのである。

(一)三卷。唐の李瀚の撰。經史中から事實の類すると相取つて、互に對照させ、四字の標題をつけて記誦に便にしたもの。兒童の教科書として盛んに行はれた。

(二)姓は韓、名は伯俞。漢代の人。

(一)國文學者。第五高等學校教授。明治九年福岡縣に生れた。よくぞ男に、趣を加へて、詩味、情味等の著もある。

(二)黑田如水のこと。如水名は孝高。播磨の人。豐臣秀吉の謀主となり、後德川氏に從つた。慶長十年（二六〇五）歿、年四十九。

老女　武家の奧向の侍女の長。

上女中　主人の側近く仕へる下女。

自修文

黑田如水

八波則吉

「あれ、大殿樣のお召だ。誰ぞゐないの。お松、お和歌、お由……あゝ誰もゐないの……。」

と、老女の菊代は頻りに上女中の名を呼んでゐるが、生憎誰も居合せないのか、返事がない。

奧座敷では、がらん〳〵とけたゝましい鈴の音。

「はい〳〵、只今……。」

老女の菊代が恐る〳〵御前へお伺する。

「お前ぢやいけない。若い者を呼べ、若い者を。」

床から上半身を摩出した老公、目は血走つて、手はわな〳〵と震へてゐる。

「只今、生憎誰も居りませんので……。」

辨ずる　わかる。とゝのふ。

腰板　壁、障子などの下部に張つてある板。

病みほゝけ　やまひの爲に愚かになること。

茶坊主　昔武家などで茶の湯の事を掌つた者。

小姓　貴人の側近く給仕する少年。

生傷　新しい傷。

「誰もゐない。どうしたと言ふのだ。」

「何ぞ私で辨じます御用ならば……。」

「いや、お前ぢやだめだ。だめだと言ふのに……。」

と言ふが早いか、老公は枕頭にあつた茶托を、老女目がけて投げつけた。茶托は危く老女の肩先を掠めて、障子の腰板に當つた。

「また始つたな。」と、庭男の喜作は眉をひそめて、箒と塵取とを持つたまゝ、こそ〳〵とお庭の隅へ隱れた。

病みほゝけとでも言ふのか、寛仁大度の如水公が、この夏以來掌を反した樣に、打つて變つた癇癪持になつた。女中を叱る。老女を叱る。茶坊主を叱る。叱るだけならまだしも、二言目には打擲する。

女中も小姓も生傷の絶間がない。で、大殿樣の前へ出るのは、誰も彼もびく〳〵もので、言はば虎の尾を履む命掛の覺悟である。

家扶　貴人の家にあつて家務、會計を司どる人。

(一)秀吉に仕へて屢〻戰功を立て、征韓の役に殊功があつた。關ヶ原の役に東軍に屬し、役後、筑前五十二萬石に封ぜられた。（二）元和九年（二八三年）歿、五十六。

家中　大名（或は小名）の家來の全體。

「困つた事だ。」と老女は思つた。

「怖い事だ。」と女中たちはつぶやいた。

中には母の病氣に事寄せて、お暇を願ひ出た者さへあつた。家扶も家老も持てあまして、とう〳〵若殿樣へ願ひ出た。若殿樣とは黑田長政公の事である。

家扶や家老の願出を聞いて、思ひ餘つた長政公は、一日父の機嫌を見はからつて、

「父上、申し上げかねますが、もう少し家中の者に對して、御寛大に願はれますまいか。」

と諫めた。

如水はにつこり笑つて、

「近う、〳〵。」と長政を枕邊に招いて、小さな聲でさゝやいた、

「わしはもう長くはない。今月か、長くて來月の中旬だらう。家來

衆望　おほくの人望。

(一)文學博士。臺北帝國大學總長。大阪府の人。世界小觀、朝鮮史話、世界の變遷を見る等の著がある。

(二)Potsdam. ドイツの首府ベルリンから西南約三〇キロメートル。風光明媚の地。

(三)Sans-Souci.（莫愁城）

(四)Frederick the Great. フレデリック ウィリヤム一世の嗣。（西紀一七四〇—一七八六年）

たちは平素わしに親しんで、そなたを畏れてゐる。どうかしてそなたに人望がつけてやりたい。わしはどんなに憎まれてもよい。いや、わしが憎まれゝば憎まれる程、そなたに衆望が歸する道理。分つたか……。」

長政の兩眼からはは〳〵と熱涙がこぼれた。

「父上、忝う存じます。」

「あゝ、それでよい。」

と言つた如水は、急に枕頭の鈴を、がらん〳〵とけたゝましく鳴して、人を呼んだ。

二〇　フレデリック大王と酒井備後守

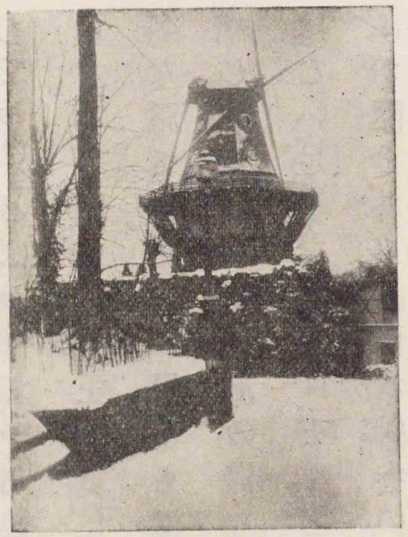
幣原坦

ポツダム(二)のサンスーシ宮(三)は、フレデリック(四)大王の記念に充

清楚

路頭に迷ふ

ちてゐる。昔大王が此所を居城としてゐた時の事、清楚な境内の樹蔭濃やかな間に、ぎい〳〵と音を立てて、靜寂を破る音がした。大王は侍臣に向つて「あれは何の音か。」と聞いて宮門の向ふにある風車の響である事を知られた。そこで風車の持主に諭して、これを取去らせる事にした。



大王の機嫌を損ねたる風車

ところが持主が言ふに、「この風車は私が先祖から傳へられた唯一の財産で、一家はこれによつて漸く生計を立てて居ります。今これを取去られては、忽ち路頭に迷はねばなり

ませんそれでも是非取去れとの仰ならば、一應公平な裁判を受けたいと思ひます。」

侍臣は大いに腹を立てた。大王は笑ひながら、「そのまゝにしておけ。」とばかりで、一向咎めもなさらなかつた。當時の人はこれを聞いて、大王の寛仁大度に感じたといふ。これは有名な話で、今にその風車も保存されてゐる。

しかし、あながちその様な話に、日本人は感心する程の事はない。足下を見れば、それと同じ様な、尚それよりも美しい話が隨分ある。責而者帥卷の十一に、藩翰譜を引いて酒井忠利の事を述べて、次の様に言つてゐる、

酒井備後守忠利の領内に、備後といふ百姓があつた。忠利

あながち
(一)佐倉藩士澁井德章の編著。四十二卷。江戸時代の明君賢臣の善言嘉行を諸書について集錄したもの。
(二)新井白石の著。十三卷。一萬石以上の諸侯三百三十七家の傳記沿革等を記したもの。
(三)德川家康の重臣。正親の第三子で備後守と稱した。寛永四年(一六二七年)歿、年八十六。

年貢
公役
かりそめに
も

神妙の至

の家來はその百姓を呼んで、「お前はこの領内に住んでゐながら、殿様と同じ名を冒してゐるのは不都合であるから、早速改名するがよい。」と言つた。百姓はこれを聞いて、歎いて言ふに、「私は人よりも一層早く年貢を納め、月々の公役をば、かりそめにも怠つた事はありません。さうして永く此所に住みつきまして、代々備後と名のり、正直者の備後で通つて居ります。今これを改名せよと仰せられましても、俄にはかなひません。何とか殿様の御名を改めて戴くわけには參りますまいか。」

家來は大いに腹を立てた。忠利はこれを聞いて、「よし〳〵。年貢をよく納めて公役を怠らないのは、神妙の至である。さ

ちば彼はそこの備後であるぞ。そのまゝで苦しうない。」

德川家康がこれを漏聞いて、「世間の愚かな人は、何でもない事に人を苦しめて、己の威を立てようとし、無益な事に拘つて、有用な利を失ふものである。然るに忠利は天性和やかにして、仁愛の情深く、智慧もまた少くない。彼の子孫は必ず繁榮するに相違なからう。」と褒めたといふ。

この東西の二つの話は、事實こそ多少違ふけれども、寬仁大度の明君が、正直な民を包容愛撫する麗しさは、恰も符節を合するが如くである。フレデリック大王の事蹟は世界の人に稱揚されて、備後守の事蹟はこれを知らぬ人が多い。自分はフレデリック大王を宣傳する前に、備後守を世界に顯彰し

包容愛撫す
符節を合す
稱揚
宣傳
顯彰

たいと思ふのである。

二　歌話

中村秋香[一]

—世界の變遷を見る—

一　とりゐ坂

白河樂翁公[二]、年十二にて尙田安[三]の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類燒しけり。大火と言ふまでにもあらざりしかど、燒死せし者多かりしかば、

この火事は人の命をとりゐ坂
　　これより上のとがはないぜん

と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよ

(一)國文學者。不忍遁舍と號した。舊靜岡藩士。明治四十三年歿。書翰、文大成、中古文鑑、新說歌がある。等の著

(二)松平定信。白河の城主。後、幕府の老中となつた。文學を好み、和歌文章を善くした。文政十二年(二八九)歿、年七十二。

(三)江戸城田安門內。

類燒す
落首

く詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まんにはさは言はじ。」とありければ、奥醫師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらするに、「言はじ〳〵。」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我の事なり。』と言ふべきなり。」となり。

すまふ
怪我

一句の事にて一首の意味を全く顚倒せしめ、過のやみ難きに出づるを明らかにせられし事、誠に「梅檀の二葉」とぞ言ふべき。

梅檀の二葉

(一)櫻町天皇の御代。(二四〇四—二四〇七年)
(二)江戸時代の國學者、縣居と號した。遠江の人。(二四二九年—明和六年)歿、年七十三。

二　あがたの宿

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中所々の人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許へ、門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なる樣もなく、机によりて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな。」と言ふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧て會釋しつゝ、餘談に及ばず、「この嵐にて一首出で來ぬ。」とて、書きて示しける歌

野分してあがたの宿はあれにけり
月見に來よと誰にいはまし

狼藉たり
沈思
野分

(一)光格天皇の御代。火災は天明八年(二四四八年)。
(二)京都の歌人。享和元年(二四六一年)歿、年七十九。

三　燒野の原

天明の火災にて、小澤蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告げて、「他の品は皆燒きても苦しからず。唯書籍だけは一冊も

多く出し給はれ。」とて、自身も年來の鈔錄本を風呂敷包にし、これを負ひて、太秦(一)なるしるべの家に避けぬ。この火にて內裏の炎上せし由を聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、內裏の燒跡を拜し奉りて、

けさ見れば燒野の原となりにけり
これやきのふの玉敷の庭

—新說歌がたり—

鈔錄本

(一)今京都市右京區。

三　まことの始

○

みがかずば玉の光はいでざらん

人の心もかくこそあるらし
玉琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず。(玉不琢不成器、人不學不知道。)

○

おこたりて磨かざりせば光ある
玉もかはらにひとしからまし

玉磨かざれば光なし。光なければ石瓦たり。人學ばざれば智なし。智なければ愚人たり。(玉不磨無光。無光爲石瓦。人不學無智。無智爲愚人。)

○

しろたへの衣のちりは拂へども

(一)禮記。

(二)實語教

(一)六道講式。

うきは心のくもりなりけり

(一)我等適、頂を剃れども心を剃らず、衣を染むれども心を染めず。(我等適剃頂不剃心、染衣不染心。)

○

むらぎもの心にとひてはぢざらば

(二)論語。

世の人ごとはいかにありとも

(二)内に省てやましからずば、それ何をか憂へ何をか懼れん。(内省不疚、夫何憂何懼。)

○

つくろひて花をさかせぬ言の葉に

人のまことは見ゆるなりけり

むらぎもの

(一)論語。

(一)巧言令色すくなし仁。(巧言令色、鮮矣仁。)

○

(二)朱熹。

すぎたるは及ばざりけりかりそめの言葉もあだにちらさゞらなん

(二)言妄りに發せず、發すれば必ず理に當る。(言不妄發、發必當理。)

○

(三)傳家寶。

人ごとのよきもあしきも心して きけばわが身の爲とこそなれ

(三)善人を見ばこれに效ひ、不善人を見ばこれを改むそ。の善と不善と皆我が師なり。(見善人效之、見不善人改。)

之。其善與不善皆我師也。

○

よき友にまじはる人はおのづから
身のおこなひも正しかりけり

(一)蓬麻中に生ずれば扶けずして直し。(蓬生麻中不扶而直。)

○

たらちねの親につかへてまめなるが
人のまことのはじめなりけり

(二)孝は百行の本、衆善の始なり。(孝百行之本、衆善之始也。)

(一)荀子。

たらちねの

(二)後漢書。

二三　多年一日の修養

村上專精(一)

佛教徒間に「天然の彌勒(二)なく、自然の釋迦(三)なし。」といふ諺がある。その意味は、彌勒も釋迦も自然にあれ程の地位になつたのではない。多年一日の如く修行を怠らなかつた結果として、一は菩薩となり、一は佛陀となつたのであるといふのである。また支那の大聖孔子は、生れながらにして道を知つてゐたものの樣に考へられ易いが、論語の中で孔子は自らその經歷を語つて、

吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えず。

(一)佛教學者、文學博士。兵庫縣の人。昭和四年歿、年七十九。

(二)彌勒菩薩。未來に出現するといふ佛。

(三)釋迦牟尼の略。釋迦は西紀前四六六年印度伽毘羅國の王家に生れ、潛思を人生に潛め二十九歲の時家を出、六年苦行した結果解脫の境に入り、八十歲で入滅した。

菩薩　佛陀

（吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。）

と言つた。即ち自分は十五歳の時から七十歳の時に至るまで、一日も怠る事なく修養を續けて來たといふのが、孔子の告白である。これに依つて見ても、釋迦や孔子の樣な大聖人ですらも、多年一日の樣に修養を繼續した結果、始めてあの樣な萬人の光と仰がれる偉い人物となつた事が分る。まして我々凡人は、一層修養を續けて行く事を心がけないでは、到底勝れた人物となる事が出來ない所以を、自覺しなければならない。

告白

しかし、世人一般の通弊として、他人に何か勝れた所のあ

通弊

るのを見ると、とかく輕卒にこれを評して、彼は才子であるとか、或は彼は幸運兒であるとか言ひたがるのである。例へば、(一)賴山陽と言へば、誰もあの人は才子であつたと考へ易く、彼の成功は勤勉に依るものであるとの考を抱く者は誠に少い。しかし、傳記に依つてこれを見ると、前者の誤謬である事が明らかなのである。

才子

(一)江戸時代の學者。名は襄、通稱久太郎。安藝の人。天保三年（一八三二）歿、年五十三。

山陽の幼時（水野年方筆）

賴山陽は德川時代の儒者(二)賴春水の子である。彼は生れて僅かに八九歳の頃、既に幾多の軍記物を讀んで晝夜怠る事

(二)名は惟完、通稱彌太郎。安藝の人。文化十三年（一八一六）歿、年七十一。

なく、時に寢食を忘れる事もあつた。遇眼病に罹つたので、父春水はその讀書を禁じたけれども、尙隱れてこれを讀む事を止めなかつたといふ。子供の時の山陽は旣にこの樣な勤勉家であつた。また傳に「山陽平生讀書に耽り、著述に勤む」。とあつて、彼は終生著述に勤めた人である。卽ち彼の壯年の時の傑作は日本外史(一)であり、また晩年の大作には日本政記(二)がある。日本政記は病中に成つた。彼はその病が革るに遇ひ、「我が死まさに逼れり。」と言ひながら尙眼鏡をかけ、手に日本政記を取り、刪補して止まなかつた。或日俄に左右を顧、「我まさに假寢せん。」と言つて筆をおき、眼鏡をかけたまゝで終に瞑したといふ。彼の少年時代の事を思ひ、また末後の傳を見れ

(一)二十二卷。漢の司馬遷の史記の世家の體に倣つて、源平二氏より德川氏に至る武家の歷史を漢文で書いたもの。

(二)十六卷。神武天皇より後陽成天皇に至る百八世、二千年間の編年史。病革る刪補する

ば、山陽の生涯は勤勉をもつて一貫されてゐたと言つてよいのである。

但し彼は性來酒を嗜んだ。毎日夕刻になれば必ず門下生と共に對飲したさうである。けれどもその分量に制限があつて、制限以上には一杯も過す事はなかつた。そして酒氣のある間は門下生と共に談論し、醒めれば卽ち書を讀み、五更に至らなければ眠らなかつた。朝はまた必ず早起し、しかも自ら衾を收めて、人を使はず、室內の掃除もまた自らこれを爲し、寒暑一定して變る事はなかつたといふ。これに依つて彼は常に人に語つて、「山陽は才子なりと言ふ者は、未だ我を知る者に非ず。山陽はよく勤めたる者なりと言ふ者こそ、眞

に我を知る者なれ。」と言つたさうである。

彼を思ひ此を考へるに、山陽は唯才子であつたと思ふのは誤謬に外ならぬ。彼は多年一日の樣な修養に依つて、自己の天才を喚び起した人である。獨り山陽のみならず、何人でも一つの長所を有し、達人であるとか、また上手であるとか評される程の人は、必ず多年一日の樣に修養して、自己の天才を喚び起した人に違ない。

達人

しかも修養は、一旦その天才を喚び起す事に努め、後はこれを廢してよいといふわけのものではない。その人の終生を期して廢する事のないのが、眞の修養である。若し中途でその修養を廢したならば、その樣な人は、その日から學問なり技能なりの退歩する人であると見てよい。翻つて老後に至つても、尙その道に於て退歩しない人があるならば、その人は常にその道の爲の修養を繼續してゐる人と見てよい。

みればたゞ何の苦もなき水鳥の
足にひまなきわがおもひかな

といふ歌がある。これは水戸黃門[一]德川光圀卿の作と聞いてゐるが、實にその通りである。江河の水面に鴨などの浮んでゐるのを一見すれば、木の葉などの浮いてゐるのと殆ど同樣で、何の苦もなさうに見える。しかし、近寄つてよくこれを見れば、少しの暇もなく彼は我が足を使ひ、その足の力に依つて、浮んでゐるのである。人もまたその樣に、外見だけで

(一)水戸藩第二代の主。夙に修史に志を致し、海内の學者を招き、祕書を渉獵して大日本史を編纂した。元祿十三年（一六七〇）歿、世に水戸三年七十。また西山公と言ふ。黃門

は何の苦もなく出來る事の樣であつても、その人自身にあつては、常に暇なくその道の爲に盡す所があるに違ない。

人間萬事休息すれば必ず退歩する。水は絶えず流れ動いてゐれば腐らぬが、停滯してゐると腐る。この規則の存する事を忘れぬ樣にせねばならぬ。隨つて修養は生命のあらん限り廢すべきものではない。多年一日の樣に繼續すべきものである。そしてさうするのが眞の修養である。

—通俗修養論—

停滯する

二四　機智縱横

一　百人一首の對句

(一)名は雙松、自ら物徂徠と稱した。その豪邁卓識、博學强記は一世を蓋つた。享保十三年(二三八八年)歿、年六十三。

(二)平安時代の歌人。參議音人の子。

會心

(三)江戸時代の儒者。名は元喬。京都の人。詩文を善くし、和歌に通じ、風流の聞えが高かつた。寶曆九年(一七五九年)歿、年七十七。

江戸時代の儒者で、古文辭の學を以てその名を當代に稱へられた荻生徂徠(一)は、一日小倉百人一首を見てゐたが、大江千里の

月見れば千々にものこそ悲しけれ
わが身一つの秋にはあらねど

の歌に至つて、その作者と歌の最初の一字とから

「大江千里、月。」

といふ一句を得た。「これは妙だわい。」と、獨り會心の微笑を漏しながら、更にこれの對句を得ようと思つて思案したが、なかなかうまい句が見附からない。

をりから門人の服部南郭(三)がやつて來た。

「これはよい所へ來た。實は……。」

と、徂徠はこの事を話した。

「大江千里、月……。成程、これはうまい句になりますわい。對句と……。いや、それはわけはありません。

春道列樹、山。

とはいかゞで御座いませう。」

これは、同じく百人一首の中の春道列樹(一)の

山川に風のかけたるしがらみは
ながれもあへぬ紅葉なりけり

に據つたものである。

徂徠思はず手を拍つて、

(一)平安時代の歌人。

「ほう、これぢや〳〵。うまいぞ服部。」

二　春水の羽織

賴春水は山陽の父で、學問を以て著れてゐたが、家は赤貧洗ふが如く(如二赤貧洗一)で、年中同じ一枚の白地の古羽織を著て、悠然としてゐた。

或時、友人の菅茶山(一)が、――この人も何時も古袴を著けてゐたが――春水に戯れて、

「われ見ても久しくなりぬ古羽織」

と浴びせかけた。

春水はにつこりと笑つて、茶山の古袴を見詰めながら、

「君の袴は幾代經ぬらん」

(一)江戸時代の儒者。名は晉帥。備後の人。文政十年(一八二七年)歿、年八十。

と浴びせ返した。

「あはゝゝゝ。」

「あはゝゝゝ。」

二人は互の古ぼけた一張羅を見合つて、快く笑つた。

三　奇童

板倉勝重[一]の子の重宗[二]が、父に代つて京都所司代となり、祇[三]園神社に詣でた。祠前に大勢の少年が集つてゐたが、その中の一人が、一つ、二つと數へてみて言つた、

「一から九までは、みんなしまひに『つ』の字がつくのに、十だけつかないのはどういふわけか。」

みんなが茫然としてゐるうちに、一人、九歳ぐらゐの子が

(一)德川氏の家臣。江戸町奉行、京都所司代等に補せられた。寛永元年(一六二四年)歿、八十三。

(二)勝重の長子。秀忠の近侍より立身して京都所司代に補せられ、在職三十年、父と共に名臣の譽が高かつた。明暦二年(一六五六年)歿、七十。

(三)今の官幣大社八坂神社。

それに應じて言つた、

「それはそのはずさ。五に『つ』が二つついてゐるから、十にはつかないのさ。」

重宗は聞いて感心した。で、翌日使をやつてその子を呼寄せた。そして二つの餅を合せて一つにしたのを、その子に食はせてから言つた、

「今食べた餅の、上のが旨かつたか、下のが旨かつたか。」

少年はちよつと考へてゐたが、突然、手を拍いて音を立てて、から重宗に問返した、

「今拍いた手の、左が鳴りましたか、右が鳴りましたか。」

重宗は愈感心した。で、この少年を使ふ事にしてそばに置

いたが、後にはとう〳〵近臣の一人に加へた。

○

板倉勝重の子重宗、父に代りて京尹となり、祇園祠に謁す。祠前に群童聚れり。一童子邦訓を以て數字を呼びて曰く、「一より九に至るまで、語尾『つ』の音を帶ぶ。十獨りなきは何ぞ。」と。群兒茫然たり。一童あり、年僅かに九歳。聲に應じて曰く、「また然る者あり。五の字既に『つ』の音を重ぬ。十の字は本訓に止る所以なり。」と。重宗聞きてこれを奇とす。翌日人をしてこれを召致せしめ、乃ち二餅を合して一團となし、童子をしてこれを食はしめて曰く、「今喫する所、上なる者旨きか、下なる者旨きか。」と。童子沈思し、忽ち手を拍ち聲を作して曰く、「今拍ちし所、左なる者鳴りしか、右なる者鳴りしか。」と。重宗益〻異とす。擧げてこれを左右に置き、後遂に近臣に列せしむ。

板倉勝重、子重宗、代〻父爲京尹、謁祇園祠。祠前群童聚。一童子以邦訓呼數字曰、「自一至九、語尾帶都音。十獨無者何也。」群兒茫然。有一童、年僅九歳。應聲曰、「亦有然者。五字既重都音。所以十、字止本訓。」重宗聞而奇之。翌日使人召致之、乃合二餅爲一團、使童子食之曰、「今所喫、上者旨、下者旨。」童子沈思、忽拍手作聲曰、「今所拍、左者鳴、右者鳴。」重宗益異焉。擧置之左右、後遂列近臣。

——近古史談——

四　賢い王子

昔、支那の東晉(一)といふ國に非常に賢い王子がをられた。或時、長安(二)の都から使が來たが、その時、王樣は側にをられた王子に向つて、「長安近きか、日近きか。」(長安近歟、日近歟。)と尋ねられた。東晉の都建康(三)から長安までは四五百里も隔つてゐたので、長安とお天道樣とどつちが近いかと、ちよつと冗談半分に尋ねてみられたのである。所が王子は卽座に「長安近し。」(長安近。)と對へて、いかにも分つた樣な風であつた。で王樣が、「何故長安が近いか。」と重ねて尋ねられると、王子は「人の長安より來るを聞く。人の日邊より來るを聞かず。」(聞人從長安來。聞人從日邊來。)と、事もなげに答へられた。「うん成程。これは奇拔な答ぢや。いかにも尤もな理窟ぢや。」と、王樣は王子のこ

(一)晉は西紀二百六十五年武帝司馬炎の建國。百五十年で位を宋に讓つた。(二)今の陝西省西安府の地。周以後西漢、隋及び唐の時代まで帝都であつた所。(三)建業。愍帝の名の業を諱んで建康と改めた。楚江の東にあつて古の吳の地。

日邊

の答を聞いて、非常に感歎された。

さて或日の事、王樣は群臣とお物語のをりに、王子の事に話が及ぶと、ふとこの奇拔な問答の事を思ひ出されて、一つみんなを驚かしてやらうといふお考から、王子をお側におよび呼びになつて、「實は先だつて長安から使者が參つた時、わしは長安と日とどちらが近いかとそちに尋ねてみた所、長安が近いと答へた。いかにも近い。が何故近いかと問はれると、ちよつと困る事ぢや。所がそちはその理由をよく知つてをるなう、皆の者に聞かしてやつてくれ。」と、王樣はさも嬉しさうに、王子を膝に引寄せて言はれた。所が豈圖らんや、王子は「日近し。」と言つて、知らん顏をしてをられる。「なに、日が近いで

もこの間は長安が近いと言つて、近いわけまで言つたではないか。」と、王様はいぶかつて尋ねられた。すると王子は「頭を擧げれば日は見えるが、長安は見えない。」と言つて、すましてをられた。「成程これは益、奇拔ぢや。自分の考へ及ばぬ所ぢや。」と、王様は王子の答の奇拔なのに愈、感服された。

二五　矛盾

夕陽は今山の端に沈まうとして、西の空一面を緋の様に染めて居ります。木々の梢がその中にくつきりと黑く浮出て居ります。をりから白馬に跨がつた輕裝の若武者が、林の中の路を悠々とやつて來ました。單騎敵陣深く駈入つて、思ふ存分に敵を蹴散し、今勝利の快感に醉うて引上げて來る途中なのでありませう。小脇にかいこんだ鋒の穗先が、木の間を漏れ來る日の光にきら〳〵と輝きます。

武士はふと駒を止めました。行く手の木の枝に、世にも麗しい物を見附けたのです。それは一枚の盾でした。黃金の盾でした。夕陽に金色眩く輝いてゐるのでした。武士は恍惚としてその盾に見入りました。誰が此所に掛けて行つたのか、どうして此所に掛けて置いたのか、そんな事よりも、その美しさがすつかり武士の魂を捉へてしまつたのです。

見入る

「おゝ麗しい黃金の盾よ。」

武士は思はず感歎の叫をあげました。と同時に、意外な別

の聲が聞えました。

「おゝ麗しい白金の盾よ。」

白馬の武士はぎよつとして、聲する方を眺めました。と、何時の間に來たのでせう、其所には輕裝の若武者が、栗毛の駒に悠然と跨がつて、やはりその盾に見入つてゐるのです。それにしても不思議な事に、自分の眼にはまさしく黃金に見える盾が、その武士には白金に見える事です。

「おゝ麗しい黃金の盾よ。」

白馬の武士は試みにもう一度言ひました。と、栗毛の馬の武士もあうむ返に「おゝ麗しい白金の盾よ。」と言ひます。白馬の武士は、何かしら恥づかしめられた樣な氣がして、微な怒

挑戰

を覺えました。

「おゝ麗しい黃金の盾よ。」

白馬の武士は意地になつて、もう一度繰返しました。すると「おゝ麗しい白金の盾よ。」と、栗毛の馬の武士も挑戰するものの樣に叫びました。白馬の武士はもう我慢が出來なくなつて、激しく叫びました、

「拙者の眼は飾物では御座らぬは……、まさしくこれは黃金の盾ぢやに。」

すると、栗毛の馬の武士も同じく聲荒らげて叫びました、

「拙者の眼も節穴では御座らぬは……、まさしくこれは白金の盾ぢやと申すに。」

「いや黄金ぢや。」

「いや白金ぢや。」

「うぬ、參れ。」

「言ふにや及ぶ。」

血氣の若武者二人は、忽ち鋒を合せました。繰出す鋒の穗先がきら〳〵と輝きます。勝負はなか〳〵つきません。二人の武者ぶりは、兄たり難く、弟たり難き有樣です。二人は心ゆくまで戰つて、兩虎相鬪ふ時は勢俱に生きず。(一)と言ふ樣に、白馬の武士は傷つき、栗毛の馬の武士は斃れてしまひました。

兄たり難く弟たり難し

(一)史記、藺相如傳。

兩虎相鬪ふ時は勢俱に生きず

それにしても、この爭の本となつた盾は、果して黄金なの

か、それとも白金なのか。傷ついた武士は、苦しい身體で向側にはつて行つて見ました。すると意外、そちらは栗毛の駒の武士の言つた樣に、やはり白金でありました。盾の片側は黄金で、片側は白金だつたのです。

眞相

これ以來、物事はその表裏を觀察しなければその眞相を誤るものであるといふ意味を、「盾の兩面を見よ。」と言ふ樣になりました。

盾と矛とに就いて、支那にはまた次の樣な話があります、

「楚國の人で盾と矛とを賣る者がありました。その盾を褒めて言ふのに、『吾が盾は堅くて、どんな物でも破れない。』と。またその矛を褒めて言ふのに、『吾が矛は鋭くて、どんな物

でも破れないものはない。』と。そこで或人が言ふのに、『ではお前さんの矛で、お前さんの盾を突いたらどうなる。』と。その人は答へる事が出來ませんでした。

楚人有鬻盾與矛者。譽其盾曰。「吾盾之堅。莫能陷也。」又譽其矛曰。「吾矛之利。於物無不陷也。」或人曰。「以子之矛。陷子之盾。何如。」其人弗能應也。

この話から、つじつまの合はない事を「矛盾」といふ樣になりました。

(一)劇評家、元新聞記者。名は義一。明治八年高知縣に生れた。少女と山水の著がある。

三七日　二十一日。

自修文

名人同志

中内蝶二(一)

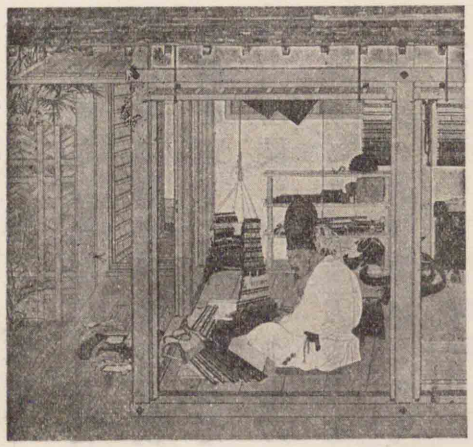
「今日より三七日の間に胄一具を作つて獻つるやう。」

興里の許へ前田侯からさういふごさたがあつた。

「今日より三七日の間に太刀一振を鍛へ上げて獻つるやう。」

貞宗(二)の許へもさういふごさたがあつた。

興里はこの五六年前から金澤(三)の城下へ出て來た甲胄師であつた。この男の作つた物は、胄でも甲でも殊の外堅牢で、先づ當代での名人であらうとの評判であつた。所へまた、去年あたりから今貞宗と名に呼ばれる刀劍師が同じ城下に現れて來た。其所で貞宗の刀が斬れるか、興里の胄が堅いか、近習たちの間に問題となり、さては前田侯よりのごさたとなつたのであつた。



甲胄師（尾形月山筆）

(一)越前に生れた。初め甲胄師であつたが、近江の長曾根に住み、後江戸に出て刀工となり、東叡山下に隱居した。虎徹と稱した。寛文延寶（二三二一―二三四〇年）頃の人。

(二)傳不詳。

(三)今石川縣（加賀國）金澤市。舊前田家の城邑。

近習　貴人に側近く給仕する少年。小姓。

冥加至極　冥加は神佛が冥々のうちに加護を垂れる事。こゝではこの上もないしあはせの意。
齋戒沐浴　ものいみをし、からだを清めること。
丹精を凝す　まごころをこめる。心のたけを盡す。
目通　貴人の前に出で謁見すること。
威儀を正す　たちゐふるまひの作法を正す。
面目を施す　ほまれを得る。
矢玉は言はでもの事　矢や鐵砲の玉は言ふまでもない事。

興里も貞宗も、そんな事情があるとはお互には知らなかつたが、各自は冥加至極な事だと思つて、齋戒沐浴、丹精を凝して鍛へ上げた刀と、作り上げた冑とを持つて城中へ伺候した。やがて君侯の目通を許され、慎んで御前に罷り出た時、興里と貞宗とは始めて面を見合せて驚いた。

君侯の御座所から一段下つて左右には、家中の侍がずらりと威儀を正して並んでゐた。

前田侯は出來上つた刀と冑とを一應あらためて見た。

「おう、これは太刀も冑も天晴の出來だ。兩人共骨折であつた。」

褒美のお言葉に興里も貞宗も面目を施して、厚く御禮を申し上げた。

すると前田侯は、にこやかに兩人を見渡しながら、

「さて興里に尋ねるが、これなる冑を頭に戴く時は、矢玉は言はでもの事と思ふが、太刀にて斬附けられた場合にも、十分にこたへ得るであらうなう。」

ひゞわれ　ひゞのこと。
切味　刃物のきれ工合。

「お言葉までも御座りませぬ。いかなる名刀にて斬附けられませうとも、ひゞわれ一つ入る事では御座りませぬ。」

興里はきつぱりと答へた。

「次に貞宗に尋ねるが、これなる太刀の切味はどうぢや。」

「恐ながら二つの胴、敷腕のたとへも物かは、金鐵をも斷つて御目にかけまする。」

貞宗も大層な意氣ごみであつた。

「ふむ、然らば貞宗、その方これなる太刀にて、興里の作つた冑を斬割つて見よ。」

「はつ、畏まつて御座りまする。」

貞宗は快くお受けをした。

色めく　動搖する。
たすき十字　たすき（襷）を十文字にかけること。
大上段　手を高く擧げて劍を持ち構へること。
青銅　からかね。
水盤　底淺く面廣く、丁度大形の皿の樣な形の陶器または鐵器。

滿座は色めき渡つた。いかなる名刀でも斬れぬと斷言した興里の胄を、貞宗が見事に斬つて見せようと言ふのだから、こんな興味の深い見ものはない。

胄は床の上に置かれた。貞宗はたすき十字に綾取つて、その前に直ると、太刀振りかざして大上段、滿身の氣合をこめて、今や斬下さうとした一刹那、

「あいや貞宗殿、暫くお待ちなされい。胄が曲つて居りまする。」

聲をかけた興里は進んで、胄の位置を心持直して引つこんだ。

貞宗は再び太刀を振りかぶつて、「えいつ」とばかり斬附けたが、刀は刎上げられて、胄はそのまゝであつた。

こんなはずではなかつたが。さう思ひながらも、拔いた太刀の納め樣がないので、うむと一つ意氣ごむと、庭前の青銅の大水盤を目がけて、「えいつ」と斬附ける。大水盤は見事に二つに割れて離

首尾好く　なりゆき好く、都合好く。
秩錄　ふち。ちぎやう。
逐電　住所を去り跡をくらまして逃げること。出奔。

れた。

「やいや、〳〵。」

君侯の褒言葉に應じて、並みゐる藩士も一度に聲を上げて褒めたゝへた。

かくて興里と貞宗との兩人は、御前の首尾も好く退出する事が出來たのであつた。

その翌日、前田侯は更めて興里、貞宗の兩人を城中に召出し、杯を與へて加州藩の秩祿をもあてがはうとの思召で、城中から迎の者を遣したが、これはまた意外にも、兩人とも昨夜のうちに城下を逐電して、二軒が二軒とも言合せた樣に、空家になつてゐるとの事であつた。

「それは奇怪至極な事だ。」

前田侯は合點がいかぬ樣で、扇を膝に立てた。名作を獻つて譽

前代未聞　これまで聞いた事がない事。空前の事。

近習頭　近習の取締をする人。

を揚げた者が、ひそかに夜逃をするとは、前代未聞のさただと思つたからである。

「何か書遺した物でもないか。」

近習頭が探らせにやると、果して雙方の空家に一通づゝの書置があつた。

貞宗の方のには、見事胄を斬つてお目にかける自信は持つてゐたのだが、それを斬損じたのは面目ないから、この地を立退くとあつた。

興里の方のには、自分は貞宗が太刀を振りかざした樣子を見て、確かに胄を二つに斬られるものと信じた。其所で胄が曲つてゐるなどと聲をかけて、貞宗のせつかく張りつめた氣合をそらした。それが爲に胄を斬られる不名譽は免れたが、考へてみると、自分の行爲は甚だ卑怯であつた。面目ないからこの地を立退く

讀めた　分つた。

(一)滋賀縣犬上郡北青柳村の字。

後身　境遇が一變化した以後の身。

(一)詩人、小説家。名は春樹。明治五年長野縣に生れた。新生、飯倉だより、春嵐、藤村詩集等の外、小説、數多の童話、感想の著がある。

といふのであつた。

これで兩人の夜逃の腹の底が始めて讀めたわけである。だが、興里は唯逐電しただけで一時をごまかす男ではなかつた。これが發奮の動機となつて、「貞宗に劣らぬ刀劍の名工になつて見せる。」といふ意氣ごみから、近江の長曾根(一)といふ所に落著いて、刀を鍛へる道に一生を打ちこんだ。

長曾根虎徹と世に名高い刀工は、實にこの興里の後身だつたのである。

二六　春は來ぬ

(一)島崎藤村

春は來ぬ。春は來ぬ。
初音やさしき鶯よ、
去歲に別れを告げよかし。

谷間に殘る白雪よ、
はうむりかくせ去歳の冬。

春は來ぬ。春は來ぬ。
寂しく寒く言葉なく、
貧しく暗くひかりなく、
みにくく重く力なく
悲しき冬よゆきねかし。

春は來ぬ。春は來ぬ。
淺みどりなる新草よ、
遠き野面を描けかし。
咲きては紅き春花よ、

樹々の梢を染めよかし。

春は來ぬ。春は來ぬ。
霞よ、雲よ、ゆるぎ出で、
凍れる空を暖めよ。
花の香送る春風よ、
眠れる山を吹きさませ。

春は來ぬ。春は來ぬ。
春をよせくる朝潮よ、
葦の枯葉を洗ひ去れ。
霞に醉へる雛鶴よ、
若き朝の空に飛べ。

春は來ぬ。春は來ぬ。
憂の芹の根を絶えて、
凍れる涙いまいづこ。
積れる雪の消失せて、
けふの若菜と萌えよかし。

—藤村詩集—

二七　鉢の雜草

相馬御風

冬籠のわびしさの慰めの一つとして、私は毎年幾鉢かの盆栽を室内に取入れて置く事を忘れなかつた。この冬にも、私は冬籠の第一のしたくとして、それをした。

そこで今私の部屋には、二鉢の白梅と、一鉢の緣白山蘭と、

一鉢の櫻草と、そして一鉢の木瓜とが、それ〴〵の自然の姿と、色と、香とを添へてくれてゐる。花を咲かせてゐるのは、唯二鉢の梅だけであるが、木瓜も昨日今日やつと二つだけ遠からず咲きさうな蕾の色を見せて來た。この木瓜は、東京に住んでゐる或友人から、去年の春、花の咲いたまゝのを贈られたので、今年もそれに負けない程の花が見たいものと丹精してゐる。だが、總じてこれ等の盆栽は、花がなくとも、幹や枝がもつそれ〴〵の姿、葉がもつ緑の色だけでも、私には眺める度毎に新たな味はひを惠んでくれてゐるのである。草木の美に眺め入る靜かな歡は有難い。

所で、ついこの間の事であるが、私はこの數鉢の盆栽を、特

眼目

にどれといふ事なしに、ぼんやり眺め廻してゐるうちに、ふと、どの鉢にもいろんな雑草の群生してゐる事に氣附いた。どの鉢にもそれの主としての木か草かゞある。私に取つては、それだけが眼目であつた。然るによく見ると、どの鉢にも、全く心に留めてゐなかつた種々な雑草が、何時の間にか勢よく伸び廣がつてゐる。中には小さな薄紫の花を咲かせてゐるのもある。またさゝやかな穗の樣な花を伸してゐるのもある。蔓の樣な莖をもつた物、粟粒程の蕾らしい物を澤山つけてゐる物。……それは〳〵、見るにつれて、容易に數へ切れぬ程樣々な種類の雑草が、いかにも春らしい氣分を狹い地面に漂はせてゐるのであつた。しかも、その何れも私が心

（笔）

して養つて來たのではないばかりか、それをむしり殘して置いた事すら、全く私の心の關しない事であつた。

それであるにも拘らず、今かうして私の心が一旦それ等の存在と結び附くと私が主として來たそれ〴〵の鉢の「あるじ」である木や草以上にすらも、それ等の雑草は私に豐かな味はひと、大きな歡とを與へてくれる。そして私は、私の家族たちにも、また訪ねて來る多くの人々にも、その歡を分たうとまでしつゝある。しかも妙な事には、誰一人それを眺めて樂しまない者はない。

所が更に妙な事には、私ばかりでなく、誰も彼もそれ等の雑草の名を知つてゐる者がない。

「どこにでもある草ですがね。」

誰も彼もさう言ふ。

しかも、誰も彼もその名を知らない。名などは知らなくてもいゝとしても、せめてそれ等の雜草のもつ特性ぐらゐは、これまでに心を留めて置いてもよかつたらうにと思はれるが、私始めそれすら氣に留めた事がなかつた。

「どうもいゝ蘭ですな。」

「梅がよく咲きましたね。」

「あれは木瓜ですか。どうもいゝ枝ぶりをしてゐますね。」

「櫻草がよく伸びましたなあ。花がなくても、あの葉の色だけで十分樂しめますね。」

誰も彼も先づそんな風である。中には

「あの木瓜の鉢はいゝ鉢ですね。」

と言つた樣な調子に、鉢に先づ目を留める人すらある。

が、そんな風でありながらも、私が特に注意を雜草に向けさす樣な事を言ふと、誰も彼もがそれをたまらなく面白がる。そして、これまで目を留めた事すらなかつた名も知らぬ雜草の美しさを、今更の樣に、口を極めて讃歎するのである。

そして中には、最後にこんな事を言ふ人さへある、

「それにしても、かうして植木鉢の中の雜草をわざ〳〵むしらずにお置きになるあなたも、隨分變り者ですな。」

それに對して私は答へる、

不精

「いや、どう致しまして。私にはそんな貴い心持はまだ出來てゐませんよ。これは私がむしらずに殘して置いたのではなくて、寧ろ私の不精の結果です。草は草で勝手に生えたんで、私自身もやつとこの頃それを見附けたんです。しかも、何年となく同じ樣にして來てゐながら、かうした草のある事に氣が附いたのすら、今年始めてなんです。あなたもおうちへお歸りになつて、あなたの所の植木鉢を御覽なさつたら、多少の差はあつても、同じ樣に草が生えてゐるかも知れませんよ。」

中にはまた、

「こんなに面白い物とすると、來年から、冬籠の間の樂しみに、かうした雜草を澤山大きな鉢にでも移植して置かうか。」

などと、何か大發見でもした樣に言つて行く者さへある。

しかし、誰一人さうした雜草に、またそれ等の美に心を留めなかつた自分を恥ぢる者はない。また自分たちが少しも手をかけず、また心も向けないかうした雜草にすらも、限りなき味はひと歡とを與へてくれる自然の恩惠に就いて語る者もない。私にはそれが何だか寂しい樣な氣もするのである。

「雜草でもこんなに面白味のあるものだとすると、來年の冬からは、一つ雜草の鉢植をやつてみよう。」などに至つては、

踏みしだく

私は寧ろ人間のづう〳〵しさを悲しまずにゐられない樣な氣にさへなる。そんな風な考をもつ人に限つて、春にでもなると、踏まなくてもいゝ草原まで踏みしだいたり、むしらなくてもいゝ草まで氣にしてむしつたりするのだらうといふ風にさへ、考へられるのである。

かうして、時には樣々な感想を抱きながらも、私はそれ等の雜草に眺め入る多くの場合に於て、何時となしに無心の歡を惠まれつゝある。そしてそれを今年の冬籠の最も嬉しい事の一つとしてゐる。

二八　菅公の詩才

(一)太政大臣基經の長子。道眞を讒して退けてから、權力をその一門に歸した。延喜九年(九〇九)、年五十九。

廟堂

時の權門左大臣藤原時平と並んで右大臣となり、廟堂に重きをなした菅原道眞が、一方、詩人及び歌人として有名であつた事は、今改めて言ふまでもあるまい。いや、寧ろ私たちには、政治家として活動した菅原道眞よりも、さうした詩人、歌人としての菅公こそ、懷かしく想ひ起されるのである。

菅公の幼時（筆者不詳）

「栴檀は二葉より香し。」（栴檀（センダン）從（ヨリ）二葉（フタバ）香（カ））と言はれる樣に、菅公の詩才も既に早くその幼年時代から發揮された。

菅公が十一歳の時であつた、如月の夜にそこともなく匂ふ梅の花の氣高さを賞でて、一首の詩を作つた。それは

「月の耀は晴れたる雪の如く、(月耀如晴雪。)
梅の花は照る星に似たり。(梅花似照星。)
憐むべし金鏡の轉じて、(可憐金鏡轉。)
庭上に玉房の馨しきことを。(庭上玉房馨。)」

といふのである。支那の詩人は梅を詠じて、

「疎影横斜し水清淺。(疎影横斜水清淺。)
暗香浮動す月黄昏。(暗香浮動月黄昏。)」

と歌つたが、月夜に梅の花の白く咲いてゐるのを、空の星がきら〳〵と瞬きつゝ輝いてゐる樣だと見た菅公の詩には、

(一)宋の隱士林和靖の山園小梅の詩の句。

いかにも子供らしい空想と、詩的天才の閃とが見られるではないか。

かうした菅公の詩才は年と共に益伸びて行つた。

時平の讒によつて、住馴れた都を追はれ、遠く筑紫の太宰府への流謫の途に就かうとした時に、年毎に慰められて來た庭前の梅との別れを惜しんで、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれそ

と詠んだ和歌の如きは、餘りにも有名である。筑紫に下る途中、明石の驛に著くと、其所の驛長は嘗て菅公が讃岐守として此所を通つたをりの知合であつたから、その餘りにも傷

(一)拾遺集。
(二)今の兵庫縣明石市。

ましい變り果てた姿を見て、人の身の上のはかなさをしみじみとうち歎いた。すると菅公は却つて慰める樣に、一聯の詩句をこれに示した。

「驛長驚くなかれ時の變改を。（驛長無レ驚ク時ノ變改ヲ。）
一榮一落これ春秋。（一榮一落是レ春秋。）」

不運な身の上を諦めた樣に見えて、しかも、諦めねばならぬ身の上の變化を悲しむ無量の涙が籠つてゐるではないか。

菅公の詩才がいかに當時の上下を通じて知られてゐたかは、次の一事を以ても窺ひ知られる。

それは菅公が五十一歳の三月の末の事であつた。(一)東宮敦

(一)第五十九代宇多天皇の第一皇子、後の醍醐天皇。

仁親王から遽に御使があつて、次の口上がもたらされた、

「余聞く、唐土には一日に百詩を作る者ありと。汝の才智は衆に超え、夙に七歩の跡を繼げり。蓋し一刻に十詩を作る、また難からずとせん。」（余聞、唐土有一日作百詩者。汝之才智超衆、夙繼七歩之跡。蓋一刻作十詩、亦爲不難。）

菅原道眞

一刻のうちに詩十首を作つて見よとの仰である。令旨を拜した菅公は謹んでお受けして、酉の刻から戌の刻まで、卽ち今日の二時間の間に、相違なく十首の詩を作つて奉つたといふ事である。

帝國讀本　卷二　終

大正十四年二月十二日印刷
大正十四年二月十四日發行
昭和五年二月五日補訂
昭和六年八月七日補訂新制版發行
昭和六年八月十日訂正新制版發行
昭和六年十二月十七日訂正再版印刷
昭和六年十二月十七日訂正再版發行

帝國讀本

定價
自卷一至卷六　各金六拾錢
自卷七至卷十　各金五拾八錢

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　冨山房
同所合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬
代表者
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　大日本印刷株式會社榎町工場

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　冨山房
電話神田三二七一―三二六
振替貯金口座東京五〇一番

版權所有

修道中學校

第一學年第三班

賀川兄

第三

賀川昇夫

賀川文庫藏書